正敏は若い女が訪ねて來たと聞くと、いつぞやの山川からの手紙を思ひ出した。ひよつとしたら山川が東京から訪ねて來て、かう云ふことになつたのかも知れないと氣がつくと正敏は一刻の間も猶豫してゐられないやうな氣になつて來た。

正敏はやがて東京から來つて來た小荷物を玄關先に投げ入れて、

「おい、爺や。そりや容易ならんこつた。女が訪ねて來たんなら相手は大抵想像がつく。お前は早く息子を呼んで來て金泉館の方へいつて呉れ俺も支度をして、すぐにあとから行くから。」といふ。

親爺は呆氣にとられたやうな顔をして、

「若様、知つて御座るのか?」と云つて、きよとりとしてゐたが、やがて正敏にせきたてられて、すぐさま濱の納屋にゐる息子のところへ驅けつけていつた。

正敏は別莊へあがつて久留米絣の書生羽織に着換へると、そのまゝ又戸外へ出て來て握太な籐のステッキを握りしめながら前後の方法を考へた。うつかり踏込んでいつて、あべこべに先方の奴に足を拯はれては大事である。と云つて、時間が延びればそれだけお絹の身には危險が增すので彼はもうじつとして我慢がしてゐられなかつた。

濱の納屋からはものゝ十分も經たないうちに親爺の息子が支度をしてやつて來た。まだ廿四五の若い者であつたが、その屈强な體軀は何者に打突かつても退けはとらないやうな心强さを覺えさせた。

息子は正敏の姿をみると、丁寧に挨拶して、

「若様。とんでもねえことださうで、今親爺からすつかり聞いたですが、どうしたもんでがせう。金泉館の方へ踏込んでいつて捕へる分にや譯なしですが、何しろ町中ですから、もしものことでもあると濱方が煩

さうがすからなあ。」
正敏は考へ深い調子で、
「それもさうだなあ。併し時が遅れると取返しのつかんことになるから。……」
「さうでがすとも、やるんなら早くやつてしまはねえぢや可けねえでがすよ。兎に角まあ金泉館へ様子を見にいつて見ますべえ。」
やがて三人は暗い松林をぬけて町の方へ急いでいつた。途々三人とも口數はきかなかつたが、妙に腹をきめたやうな顔をして歩いてゐた。
道が一旦海岸へ出て、それから早川口の松林の方へ入らうとすると、三人はふと行手の路に異様な人影が動いてゐるのを見た。そこいらは四邊に人家もなく、磯馴松の叢がこんもりとしてゐた。堤防のすぐ下では早川の急瀬が滔々と水音をたてながら流れてゐる。夜となると人ッ子ひ

とり通らないやうな處であつた。
その人影を最初に見付けだしたのは正敏であつた。丁度川口の方から來る辻のところに三人の人影が佇んで何やら頻りに云ひ罵つてゐる様子である。夜が闇いので、男か女かちよつと見分けがつかなかつたが、ぶつぶつ罵つてゐるのは確かに男の聲であつた。
正敏は一番先に歩いてゆく息子の袂を控へて、
「おい、誰れか彼處にゐるぢやないか。ひよつとしたら絹かも知れないから、様子を伺つてみようぢやないか。」と極めて低い聲で云ひながら、何かしら直覺がひらめいたので、彼はそのまゝそこへ歩みを止めた。
親爺も變に思つたかしてそこへ並んで立止まつてしまつた。
息子はやがて履いてゐた下駄をぬいで、なるべく足音をたてないやうに、濕つた砂地のうへを人影の方へ忍び寄つていつたが、やがて引返し

て來て、

「若様ありやたしかに、お絹さんでがすよ、男がひとりに女がひとりで、何だか頻りに責めてゐるやうですが、兎に角居どころが分りや譯やねえ、此處なら相手の野郎を半殺しにしてやつたつて構はねえから、もうすこし傍へいつて様子を見ますべえ。」といふ。

正敏は自分も下駄をぬいで松の小蔭を息子のあとから人影の方へ歩いていつた。そして向うから十間と距たらぬところまで近寄つていつて、そこの樹蔭へ身をかくして、じいつと様子を窺つてゐた。

そこに立つてゐるのはたしかにお絹であつた。星影を透かしてみると、脊丈の高い男ともう一人若い女が兩方からお絹を取圍んで、何事か頻りに脅迫してゐる様子である。

男の聲はひどく醉つてゐる調子で、

「なんでえ、そんなことを云つてゐた日にや夜が明けてしまはあ。此れほど云つても分らないんなら、もういつそ此處で僕は君を撃殺ろして、僕も一緒に自殺をしてしまふ。此りやなにも威嚇を云ふんぢやない。僕はもう絶望して、これから先生きていくことの出來ない男なんだ。君といふものに依つて、どうかして希望をつながうと思つてゐたのに、それまで拒絶されてしまつた上はもうどうしても覺悟をきめなけりやならない。人間は死ぬ氣になりやどんなことでもやる。どうせ行きがけの駄賃だ。此奴も連れていつてやれと思へば、この短銃の引金を引きさへすりやいゝんだ。」と、云つて、頻りに何やら握つた右の手を振つてみせる。

もう一人の女はその腕に縋つて、

「山川さん、どうか後生ですからそんな恐いことは云はないで下さい。そんなことをしなくたつて、今迄の話しでお絹さんにはもうよく貴方

の心持ちが分つてゐるんだから、さう貴方のやうに性急に云はなくたつていゝぢやありませんか。お絹さんは明日の朝までに側とか返事をする。と今もきつぱり云つたんぢやありませんか。」その聲はもう途方に暮れてゐるらしかつた。

男はそれでも執念深い調子で、

「そんな、そんな子供誑しを云はれて、こゝまゝみすみすお絹さんを遁がして耐るもんか。僕にやもうそんな餘裕はないんだ。僕は今の今返事をして貰ひ度いんだ。」

「そんな無理なことを云つたつて駄目ですわ。そんなことをしてゐるうちに、今の電話で、別莊から誰れか來でもしたら大變ぢやありませんか。ひよつとして警察へでも訴へられたらどうして？」

「警察へでも何處へでも訴へるがいゝぢやないか。かうなつたうへはいつそこの生命まで取つて貰ひ度いんだ。僕はいつそのこと警察へつかまつて、牢へでも打込まれてしまつたらこの苦痛があきらめられていゝだらうと思ゐるんだ。」

お絹はとみると、もうさつきからひと言も口をきかないで、唯身も世もあられぬやうにひた泣きに泣きつゞけてゐるのであつた。その悲しげな聲は正敏達のゐるところまで綿々と咽んで來て、みるもいぢらしい彼女の姿が暗闇のなかゝら浮き出してみえるやうに思へた。

正敏は堅く拳を握りしめて今にもそつちへ飛び出してゆきさうな恰好をしてゐた。

向うでは三人とも一ぺと口を噤んでしまつたが、稍しばらくたつと男はふらふらとお絹の傍を離れて、何かしら暗闇のなかでもぞもぞしてゐたかと思ふと、突如彼の腕の影からはばつと閃めく火光と一緒に帛をさく

やうな一發の銃聲が聞えた。
正敏は愕然として、思はず樹蔭を飛出したが、つゞいてもう一發の銃聲がひびくとともに今迄見えてゐた男の姿はよろよろと路の面に打倒れてしまつた。
別莊番の親爺と息子とは正敏よりも先に飛び出して、
「お絹さあ。」と、叫んで、ぼんやり喪心したやうに突立つてゐるお絹の傍へ走り寄つていつたが、向うでも悸乎としたらしく、しばしの間は言葉もなかつた。
正敏もそのあとから走り寄つて、
「おい、絹。どした、怪我をしやしないか。」
と叫んだが、それを聞くとお絹はもう前後の見さかひもなくなつたやうに、突如正敏の胸へ顔を埋めて、

「若様？」と叫んだぎり泣きくづれてしまつた。その樣子でみると彼女は幸ひに微傷だも負はなかつたらしかつた。
正敏はお絹の體を片手で支へながら、
「おい、爺や、此方はいゝからその男の方をみてやれ。」と、息せき叫んだが、爺やはもううろうろしながらそこらを慌てまはるばかりであつた。
男の倒れたところにはおていさんが驅け寄つて、涙聲を振り絞りながら、
「山川さん。どうして、山川さん。」と、呼び生けてゐたが、しばらくする息のぬけたやうな聲で、
「おていさん。そ、その短銃をとつて呉れ。もう一發だ、もう一發だ。」
と、きれぎれに云ふ。

「そんな馬鹿な、貴方何故こんな馬鹿なことをして呉れたんです。」と云つたが、それと一緒に、男の聲がかすかに、
「痛い、痛い。」と呟いてゐるのが聞える。
正敏は思はずその聲にひかれてそつちへ歩いていつたが、打倒れた山川にもその姿が見えたとみえ、半狂亂になつた聲で、
「誰れだ。誰れだ。」と、叫ぶ。
正敏はきつとした聲になりながら、
「貴様こそ何者だ。こんな不埒な眞似をして、このまゝにはして置かんぞ。」といふ。
男はもう一度、
「誰れだ、誰れだ。」と、云つたが、いつかその聲は鈍い唸めき聲に變つて、

「その女は俺のものだ。その女は俺のものだ。」と、云ひつゞける。
お絹はそれを聞くと、唯口はきかずに早く此場を立去らうといふやうに正敏の肩を彼方へ押した。正敏もひよつとして通行人でもあつてはといふ觀念がひらめいたので、急に我に返つたやうに、
「おい、爺や。あとはお前達に賴んで置くぞ。」と、云ひ捨てゝ慌たゞしくその場を離れた。
「うむ、ありや松平の若様だな。畜生、覺えてゐろ。」と、云ふ男の聲がやがて彼等のあとを追ふやうに聞えて來た。
少しいつてから様子はどうかと振顧つてみると、そこでは別莊番の息子が何やら男と云爭ひをしてゐる聲が聞えて、それと同時に二つ三つ擲り合ふやうな音が聞えた。つゞいておていさんの、
「あれえ、……」と云ふ息塞まるやうな叫び聲が聞えて來た。

正敏はお絹の肩を抱いて、そのまゝ後には氣を殘さず大急ぎで別莊の方へ歸つていつた。

二十

別莊へ歸ると正敏はそのまゝお絹を自分の書齋へ連れていつて、氣の靜まるのを待つて、今宵の出來事を詳しく訊ねた。お絹はおていさんに連れ出されて金泉館へいつたことから、そこで脅迫されたこと、それから隙をみて別莊へ電話をかけて救ひを呼んだこと、それを又山川が知つて、今度は別莊まで送ると云つて、あの松林のなかへ連れ込み、さつきのやうな恐ろしい目に逢はせたことまで包まず隱さず話した。そしてまだ恐怖の念が消えないやうに低い啜り泣きの聲をたてながらぶるぶる肩を慄はしてゐた。

そこへ別莊番の親爺と息子が息せき歸つて來た。そして正敏達が立去つてからの模樣をかはるがはる話しながら親爺は、

「どうも私はぶつ魂消げてしまひましたゞあ。ぽんと鐵砲の音がした時にはどうなるかと思ひましたが、意氣地のねえ奴もあるもんぢや御座んせんか、あれほど云つて死ぬ氣で自分を打つた丸がほんの肩先をかすつたゞけなんでがす。」といふ。

正敏は話の筋道で大方樣子も分つて來たので、

「ぢやなにか大した傷ではなかつたんだな。そりやいゝ鹽梅だつた。もし死にでもすると又事が面倒になる筈だつたが……」

息子はそれと一緒に口を出して、

「いゝえ、死ぬどころぢやありやしません。喉をうつつもりだつたのが外れて肩の骨へ穴があいただけなんです。若樣がたがいつてしまひなさ

るとのこの起き上つて、若様のことを聞いてゐられねえやうに云ひやがるので、怪我をしてゐるのに可哀相とは思ひましたが、二つ三つどやしつけて遣りましたよ。」と、さも得意さうに云ふ。

別荘番の話では山川をそのまゝにして置く譯にもいかないので、醫者のところへでも連れていつてやらうとは思つたが、あんまり面が憎いので、默つて樣子をみてゐると、それから間もなく彼はおていさんに助けられてそのまゝ町の方へ引上げていつたといふ。

別荘番の親爺はあとの見せしめにもなるからと云つて一應警察へ訴へて置かうとは云つたが、正敏はそれを肯んじなかつた。何ごとも向ふから刀向つて來ないうちはこのまゝ秘密のうちに葬つて置く方がいゝと云つて、彼は相手の素性をかいつまんで彼等に話した。そんな手段をとるにしては餘りに正敏の地位が高すぎた。

別荘番の親爺達が歸つてしまふと、正敏はそのまゝお絹をいろいろと親切にいたはつてやつた。他からの迫害が激しくなればなるほど不愍はまさつて、いづれそのうちには何とかして山川の方のことも心配のないやうに處分してやらうとしみじみ思はずにはゐられなかつた。

お絹はもう曉方ぢかくなつてからいつものやうな嬉しい心持ちで自分の部屋の方へ歸つていつた。

そのことはそれなり人の口の端にもかゝらずに、全く秘密のうちに包まれてしまつたのであつた。

それから四五日經つた或日のこと、東京の本邸からは突然老女のお國が小間使のお春を連れて別荘へやつて來た。その時正敏は勉強に疲れた頭腦を休めるために遊び半分に庭へ出て草花の鉢物の手入をしてゐたが、お絹も用がないので甲斐々々しく襷がけになつてその手傳ひをして

ゐた。もう春もすぐ眼の先へ迫つてゐることゝて、海の長閑に晴れ渡つて、人の心も何處となく浮々してゐる。お絹のはしやいだ笑ひ聲は明るい日の光のなかに冴々と響いてゐた。

何の前觸れもなしに突然お國は別莊の庭口から入つて來たので、二人とも度膽をぬかれて、お絹の方は云ひ甲斐もなく頰を染めたりした。お國はさあらぬ顏で、

「まあ、若樣。あんまり思ひがけない者が參りましたんで、吃驚遊ばしましたらう。ほゝゝゝ。」と、云つて笑つたが、正敏はその顏をひと眼みて、何ごとかたゞならぬ氣勢がお國の眼の底に隱されてゐるのを見ぬいた。

「はゝゝゝ。國も人が惡いねえ。全く吃驚したよ。だがよく來た。まあ上れ。」と云つて、正敏はつとめて心の惑亂を押し隱しながら、自分から先へ緣端へ上つたが、お國はそのあとに續いて上つて來ながら、

「ほんとにいつ伺ひましても御別莊の方は氣がせいせい致しますで御座いますねえ。ほんとにこんなところへやつて頂いてお絹さんも結構な人ですねえ。」と何事もないやうな調子で云ふ。

お絹は襟をはづしてそのまゝお春と一緒に勝手の方へ行つてしまつた。

お國は座敷へ入ると次の間の敷居際へ下つて、改まつた挨拶を申上げたが、東京の方の本邸のことばかり云つてゐて、ちつとも用談らしい話に移らない。しまひには正敏ももどかしくなつて、到頭、

「おい、國。何か用でもあつてお前は此方へ來たのか。」と、自分の方から切り出してみた。

と、お國は又笑顏になつて、

「いゝえ、若様。別に御用と申すんぢや御座いませんけど……」と、云ひながらちよいと正敏の顔をみて、「あの絹ももう大分長くなりますので今度は私の一存で春と交代致させませうと存じてねえ。それに奥の方の思召しで、今日は一日暇をやるから御別荘へ伺つて保養をして來いといふ難有い仰せが御座いましたものですから、私もそんな嬉しいことはないと存じまして、急にお邪魔に伺ひまして御座いますの。」と、云ふ。

それを聞いた正敏の胸は俄かに激しく躍つてきた。ひよつとしたらお絹との間が本邸の方へ聞えたのではあるまいかといふ考へが先づ何よりも先に湧き起つて來た。

正敏は強ひて顔色を正しながら、

「ぢや何か、絹は東京へ連れて歸るのか？」と、云ふ。

お國は飽くまで笑顔を崩さずに、

「はい、あの是非さうさせて頂き度いんで。絹ももう長い間こんな結構な目に逢はして頂きましたんで御座いますから、今度は春に讓りませんではねえ。」

正敏は態と不滿らしい顔になつて、

「併しそりや困るなあ。絹はもう此地のことにすつかり馴れきつてゐるのだし、俺ももう半月もしたら東京へ歸り度いと思つとるのだから、今交代させるとなると、迷惑するのは俺ばかりだがなあ。」

「ほゝゝゝ。さう仰有ればさうで御座いますけど、どうか何かのことは私にお免じ遊ばして、絹はこのまゝ東京の御本邸の方へ引上げさせますやうに致させて頂き度う御座います。それに他に又いろいろ事情も御座いますんですから。」と云ふ。

正敏はそれを追究するやうに、

「併し、もともとあれは俺づきの小間使ひといふことになつてゐるんだから、此方へ置いたつて邸の方へは何も差支へはない筈ぢやないか。」

「さあ、それが若様。又そこにはいろいろなことが御座いまして、……」と、云つたが、何か心に思ひきめたらしく、急に老女らしいしつかりした威嚴をみせながら、「それも、あの話し致さなければお分りにはなりますまいが、實は若様へこんなことを申上げて何ともお詫びの致しやうも御座いませんが、實はあの絹については少し存じよりが御座いますのです。つい一昨日のことで御座います。あのお邸の執事の岡田のところへ宛てまして妙な手紙が舞ひ込みましてねえ。……」と、云つて正敏の顔色を讀むやうに、お國はじいつと彼の眼のところを見詰める。

正敏は思はず顔を背けて、

「そりや何か絹のことでか？」

「はい、左様で御座います。こんなことを申上げて御立腹になつては困りますけど、ほんとうのことを打割つて申上げませんと、又若様もお心持ちをお惡く遊ばすといけませんから。」

「なんだ、聞かして呉れ。俺は怒つたりなんかしやしないから。」とは云つたが、正敏の眼はやがて漸次と妙な不安な色に掩はれてゆく。

お國は聲づくろひをしながら、

「それもあの極くつまらないことなんで御座いますけど、實はあの、絹がかうして若様おひとりのところへ參つて居りますもんですから、何うはき違へましたか世間にはそれを妙にとる人もあるとみえまして、變なことを書いて寄越しましたんで御座いますよ。もとより若様がそんなことをなさるお方かお方でないかといふことは私どもでもよく存じて居りますし、又絹にしましてもそんな女でないことはようく分つて居ります

けど、此處でそんな噂がたつてゞも參りますと、譬へ嘘にもせよ、御迷惑のかゝるのは若樣で御座いますからねえ、そんなこんなを思ひ合せますと此の場合どうも絹の身をひかせるやうに取計らひました方がいゝかと存じまして、……」

正敏はそれを聞くとひよつとしたらその手紙が山川の仕業ではないかと思ひつきながら、

「一體そんな手紙は何處から來たんだ、馬鹿々々しいにも程があるぢやないか、差出し人の名は分らんのか。」

「それがまるで分りませんので御座います。幸ひ岡田が開封いたしましたので、その場だけのことに致しまして燒いてしまひましたけれども、これがもし奥へでも聞えましたらそれこそ大變で御座いますからねえ。」

と、お國ははらはらしたやうな顏色になる。

「世の中には馬鹿な奴もあるもんだねえ。誰れがそんなことをしたのだらう。不埒な奴だ。」と、正敏は腹立たしさうに云つたが、しかし心の底ではもう一言もないのであつた。正敏にはこれ以上云ひ募るだけの勇氣がなかつた。

お國はその日夕方までゆつくり遊んで、夕飯を濟ますとお絹に支度をさせて共に歸京の途に就いた。お絹もお國からすつかり事の入譯を聞かせられたとみえて、歸り際には耐らなく悲しさうな顏をしてゐた。そして愈別莊を出るといふ時、お絹はお國に連れられて態々正敏の書齋へ挨拶に來たが、その時にはもう捗々しく口もきけないやうに唯、

「どうも長々有難う御座いました。それではお邸の方へ歸さして頂きますから、どうか若樣も御機嫌よう。」と、口籠りながら云つたきりであつた。

お絹はそのまゝお國のあとに引添うてしほしほ座敷を出ていつたが、そつと此方を振顧つた時その眼には涙が一杯に溢れてゐた。

そのいぢらしい姿はいつまでもいつまでも正敏の眼の先にちらついてゐた。

その夜から正敏には耐へ難い寂寥のその日その日が初まつたのであつた。

二十一

黄昏は今海にも陸にも明るい異様な紅色を漲らしてゐる。吹く風もないので、四邊の風物はまるで夢の國のやうなもの悲しい靜けさの底にまどろんでゐるやうに見える。そのなかで正敏は書齋の縁に置かれた籐椅子のうへゝ腰をかけて今着いたばかりのお絹からの手紙を讀んでゐるのである。

「ひと筆しめしあげ參らせ候、その後は本意なくもお別れ申し候てより御目もじの節もなく、日々お慕はしき御面影のみ心に思ひつゞけながら悲しき日を送り居り候が、若様には御機嫌如何に御暮らし遊され候や、伺上まゐらせ候。

扨て御本邸へ歸りましてよりいろいろ思ひ合はせ候ところ先日岡田様への御手紙と申すのは正しく山川のしわざにて、その後も幾度となく同じやうな手紙を送り參り皆様の御迷惑、ひいては私まで如何はせんと心のみ痛め居候次第に御座候が、そのこと御奥の御聞きに達し候爲めか、昨日突然お國様の御言葉にて私こと御屋敷より御暇を頂かねばならぬやうなことになり申候。もうこのうへは如何やうに致しても御屋敷の御奉公も叶はぬ由にて御座候まゝ實は私、昨夜涙ながらに御暇を申し、また

浮世の波に弄ばるゝ身となり申し候。若様も御存知のとほり私事此地にはたゞ一人の身寄りとてもなく、御屋敷を御暇申せしうへは何處へ寄邊も御座なく、昨日より途方に暮れ、行末のことを思ふにつけても心細さの涙にのみ暮れ居り候。

かくなることも身のさだめにて候へば誰れを恨むすべも御座なく候へども、女の身にては果敢なきことのみ思ひ出でられ、母だになくばと悲しき覺悟も起り候がそれにつけても若様の御情しみじみと忘れ難く、數ならぬ此身にあまる御思召しをかけられ候こと嬉しく思ひまはされ、末しゝうは如何やうに相成候とも、御情の露に生き度き願ひにて御座候。ついては私こと身の振りかたもとくと御相談申上げ度く、是非々々今一度御目もじ致し度く存じ候が、御別莊へ參り候ては人目もしげく候まゝ、何卒御都合のよろしき時、なるべく早く御目もじ相叶ふやう願上まゐらせ候。勝手がましき申し分にて何とも申し譯も御座なく候へども、たよりなき身を憐れと思召し、御見捨て遊ばさぬやうくれぐれも御願申上まゐらせ候、……」

そこまで讀んで來ると正敏は耐らなくなつて、その手紙で顏を掩つてしまつた。あのお絹はつまらぬ人の仇を受けて邸を追はれてしまつたのである。寄る邊ない身を又浮世の荒波のなかへ突き出されてしまつたのである。それを思ふと正敏はお絹の身が此上もなく可哀相に思はれて、彼としてはとてもこのまゝに打棄てゝ置くことは出來ないのであつた。

お絹が今居るところは神田の連雀町にある蔦屋といふ口入屋であつた。邸を出されては行先もないと見え、彼女は思ひ餘つて次の奉公先を捜すためにそんな家を頼つていつたのであらうが、何處へ縋りつくとてろもない身の心細さ。それを思ふと正敏の眼にはお絹がしよんぼり首垂

れながらその口入屋の暖廉をくゞつてゆく姿が見えるやうだつた。

正敏はどうすることも出來なくなつて、それから長いこと思ひあぐねた末、とにかくすぐに歸京して、お絹に逢つたうへとくと相談をきめようと決心した。さう思ふと一刻の間もぢつとしてゐられなくなつて、彼はすぐさま着換へをして、お春には一寸本邸へ歸つて來るから今夜は早く寢て呉れと云ひ置いて別莊を飛び出してしまつた。

國府津の停車場へ來てみると丁度折よく東京行きの列車が出るところだつたので、正敏は慌てゝそれへ乘つた。そして焦悶かしい思ひに急かれながら大船や横濱も浮の空で通り過ぎて、午後の九時にやつと東京へ着いた。彼は停車場からすぐさま電車に乘つて、神田へ向つた。

小川町で電車を降りると正敏は妙に人目が怖ろしくて襟卷でふかぶかと顔を包みながら急足に連雀町の通りへ入つていつた。蔦屋といふ口

入屋は捜すまでもなく、その通りの左側のところにあつた。二階建ての粗末な家で、表口には摺硝子の汚れた戸がしまつてゐて、その面には「つたや」と紅い字で書いてあつた。

若樣育ちの正敏は生れてから一度もさうした家の門をくゞつたことがないので、さすがに氣憶れがして足が先へ進まなかつた。それでもお絹のことを思ふとそんなところで躊躇してはゐられないので、やがて思ひ切つて、そこの硝子戸をあけてなかへ入つた。

なかは六疊ばかりの上框になつてゐて、大阪格子をはめた奥の入口のところには帳場のやうな机か二脚ほど据ゑてあつて、そのうへには奉公口や就職口を書いたビラが幾枚となく張りつらねてある。そしてがらんとした店先の火鉢の前にはひとりの人の惡さうな親爺が薄暗い電燈の下で夕刊を讀みながら煙草を吸つてゐた。

正敏は上框のところに立つておづおづしたやうな顔をして、
「あの一寸聞き度いんだが、こゝに清田絹といふ女がゐやしませんか。」
と、云ふ。
親爺は徐かに顔をあげて、眼鏡越しにじろじろ彼の方をみながら、
「あんたは何誰です？」と、意地の惡さうな聲で云ふ。
正敏はそれで一層氣臆れがして、
「いや僕はちよつと用があつて來たのだが、もし居るなら一寸逢はして呉れませんか、逢へば分るのだから。」と、慄へ聲で云ふ。
親爺は迂散臭さうに默つて正敏の顔ばかり見てゐたが、やがて、
「それはこの家にゐるんぢやないです。此處は口入屋だからそんなものを置いちやゐない。」と、ぶつきらぼうな聲で云つて、「この横丁に菊榮館といふ下宿屋があるから、そこへいつて聞いて御覽なさい。」と、云ふ。

正敏はそれを聞くと禮を云つて、そのまゝそこを出た。そして云はれたとほりにすぐ二三軒先の横丁を入つていくと、そこの突當りになるほど菊榮館といふ見すぼらしい一軒の下宿屋があつた。二階づくりの窓口には紅黄い燈の影が映つて、見るから廢殘者の群が泊つてゐるやうな家であつた。
正敏は建附の惡い格子をがたびし開けてなかへ入つたが、出會頭にひとりの子守兒のやうな小婢が出て來て、怪訝さうに彼の顔を見守る。彼は氣が急くので、今口入屋で訊ねたと同じ調子で早口にお絹の在否を訊く。と、小婢は挨拶もしずにその女の人は二階のとッつきの座敷にゐるからと云捨てゝ又奥へ入つていつてしまつた。
正敏は云はれるまゝに玄關のすぐ傍の急な段階子をあがつていつたがその上り口の廊下のところには同じやうな座敷が三間ほどつゞいてゐ

て、その一番とつゝきの破障子には束髪に結つた女の黒影がふらふら動いてゐる。正敏はそれを見たゞけで耐らなく嬉しくなりながら、突如その障子を開けてなかへ入つた。そして、

「おい、絹。」と、後から聲をかけたが、その聲で悸乎として振顧つたのは正しくお絹であつた。

お絹は思ひもかけぬ正敏の姿をみると、夢かとばかり驚いて、

「まあ、若様。」といつたぎりしばらくの間ぼんやり正敏の顔をみてゐたが、やがて、「ほんとにこんな穢らしいところへ勿體ない。」と云つて急に泣き出してしまつた。

正敏はそれをなだめて、

「一體どうしたといふんだ。俺はあんまり突然なんで嘘かと思つたが、……」

「いゝえ、もうどうかお邸の方のことは仰有らないで下さいまし。もとを申せば矢張り私から出ましたことなんで御座いますから。」

「いや、そりやいかん。そんなことは兎も角として、一應邸の方の事情を聞いて置かなけりや、このまゝに打棄つて置く譯にやいかない。」

「ではあの若様はまだお邸の方の事を御存知ないんで御座いますか？」

お絹は泣き膨した眼に涙を一杯ためながら暗い五燭の電燈の光でさも懐かしさうに正敏の方を見上げた。

「聞くも聞かないもまだ俺は邸へ歸らないんだ。お前の手紙を讀むとも耐らなくなつてその足で此處へやつて來たもんだから。」

「まあ、そんなことを仰有つて勿體ない。私そんなことを伺ふともう嬉しくて、……。」お絹はそのまゝせぐりくる涙に咽びながら、邸の方のことをきれぎれに話しはじめた。山川からの再三の手紙で、事が面倒と見

てとつたお國は、一大事にならない前に松平家の名譽を思ふところからこの憐れなお絹を解雇してしまつたのであつた。

正敏はそれを聞くと、お國の仕打ちが腹が立つてならなかつたが、お絹は涙ながらにそれを抑へて、

「もう何ごともかうなりましたうへはあきらめるより他に仕様が御座いませんわ。お邸の方でも私が居りましてはどんな大事になるか分りませんのですから、出ろと仰有るのも決して御無理とは思ひません。たとへどんなことが御座いましてもこれほど御厄介になりましたのですからちつともお恨みとは存じませんが、唯私何よりも悲しいのはこれから先又どんなことで若様にお眼にかゝれなくなるやうになりやしないかと、それが心配で耐らないんで御座いますわ。若様と私とでは身分から申しても餘り違ひ過ぎますんですし、どうせ末ながく眼をかけて頂かうなんて厚

顔しいことも考へちや居りませんけど、いつどうなるか分らない今の身のうへと思ひますと、私もう悲しくて、……」

「そんな馬鹿なことを云ふもんぢやない。俺はどんなことがあつてもお前を見捨てるやうなことはしないから安心してゐろ。」さう云ひながら正敏は泣き沈むお絹を愛撫した。

お絹は邸を出るとどうにも身の振方がつかないので、以前おていさんの宿へ厄介になつてゐる時分、一度行つた覺えのある入口屋の蔦屋へ行つて何處かさし當つて、奉公口を捜さうとしたのであつた。

二人はそれから夜更けまでさまざまに語り合つたが、まだ世間といふものを少しも知らない正敏にはいゝ智慧も出ないので、いづれ又明日ゆつくりと逢つて篤と相談をきめることにして、その晩正敏は十一時過ぎてからひとまづ本邸へ歸つていつたのであつた。

正敏はそれからお絹ともいろいろ相談しあつた揚句、兎に角當分の間は正敏の方から生活を支持することの出來るだけの費用をお絹にやることにして、それでひと先づお絹の身の振方はついた。その他にもつといい方法もと思つて、お絹も百方氣を配つたが、しかし今の身では自分でどうするといふことも出來なかつた。人の情に縋つて生きてゆくよりほかに道のない浮草の身では、親切にされるがまゝにその人に頼つてゆくより他にはもうどんな生きやうもなかつたのであつた。

そんな下宿屋などにゐては又どんな誘惑の手が迫らうも知れないので正敏は何處か靜かな山の手の町へ素人下宿か、さもなくば同居させて呉るやうな家を捜せといつた。お絹もその方が安心なので、その翌日から

早速さういふ家を捜して歩いたが、さて借りるとなると中々いゝ家がない。それでもやつとのことで牛込の砂土原町に一軒、比較的恰好な家を見附け出すことが出來た。

そこは階下は陸軍省の糧秣部へ勤めてゐる薄給な老書記で、家にはその夫婦きりゐない。そして二階はたつた六疊であつたが、賄ひもつけてくれるといふので、ひとりで住むにはまことに都合がよかつた。お絹は月八圓のきめで、その六疊を借りることにした。そして正敏から貰つた金で一寸自炊ぐらゐ出來るだけの世帶道具も買ひ集めるし、布團のやうなものも自分で安布を買つて來ては隙に任せて仕立てゝ着た。

正敏はそれが極まる前に小田原へ歸つていつたが、そのうちに機會をみつけて愈々東京の方の本邸へ引上げて來た。もう論文の準備も大方出來上つたので、彼は東京へ歸つて新らしい講座を聽講に出懸ける傍ら、

集まつた材料を取捨して論文の起稿に取懸る支度をした。

正敏がお絹に逢ひにゆく日は大方定まつてゐて、大抵一週間に二度は逢つた。それもお絹の家へゆくのは何となく氣がさすので、今日逢はうと思ふ日には前から葉書で打合はせをして置いて、人目を忍んで郊外の方へ散歩に出たり。一緒に飯を食ひにいつたりした。

その逢瀬は漸次と度重なつていつた。お絹にはさうした些やかな暮らしながら自分の居間と名のつくものを持つてゐて、自由に正敏と逢曳きの出來るのがひどく嬉しかつた。彼女には東京へ出てから經驗した生活のなかで、それが一番幸福の多い生活であつた。あんまり遊んでばかりゐても濟まないやうな氣がするので、彼女は家事の傍ら近邊の裁縫學校へ通つて、裁縫の稽古をしたりした。

或日のこと、正敏はいつものやうに手紙で逢ふ日の打合はせをして、

牛込の停車場で出逢ふやうに時間などもすつかり極めて手配りをして、日の暮れがたに人目を忍びながら停車場へやつて來た。いつもは極つて先へ來て待つてゐるお絹がその日ばかりはどうしたものか影も形もみせない。薄暗い電燈の點つた停車場の待合室には徒らに風寂びて、人待ち顔な女の姿さへ見えない。

正敏は變に思つたが、そのうちに來るだらうと思つてぼんやりベンチへ腰を卸して待つたゐた。待つ身には時の進みが遲くて、正面に懸つた大時計はいつまでたつてもなかなか針がすゝまない。砂利敷の道に足音が聞える度に彼は胸を躍らせながら、そつちへ眼を配ばつたが、いつもそれは徒勞に了るのであつた。

そのうちに指定の時はもう一時間も過ぎてしまつた。で、正敏も我慢が出來なくなつて、お絹が辿つて來さうな道筋を捜して歩きながら、砂

土原町の彼女の宿の方へいってみた。

途中では到頭逢へずに、やがて彼は砂土原町の、とある阪道の下にある峰といふお絹の宿の前まで來てしまつた。そこは一寸とした二階家で小格子をした潜戸はすぐ玄關にくッついてゐた。お絹の借りてゐる座敷は二階なので、正敏は長いこと往來に佇んで階上を振り仰いでゐたが、そこの障子には電燈の光は映ってゐながら、ひっそりと靜まりかへって人のゐさうな氣勢もしない。

正敏はいらいらして來たので、到頭思ひきってそこの潜り戸を開けて玄關へ立つた。

家のなかゝらはひとりの婆さんが咳をしながら顔をだして、

「誰方さんです？」と、云ふ、

正敏は態と戸前の暗いところへ姿を隱して、お絹の在否を訊ねたが、

婆さんは事もなげな調子で、

「あ、清田さんですか。清田さんは今日一寸お留守です。」といふ。

正敏は何時頃出懸けていったかといふことを疊みかけて聞いたが、婆さんは首を傾げながら彼此三時頃だつたらうと答へる。そして此方からは訊かないのに、誰方か男の方が訪ねて被來つて、御一緒にお出懸けになつたと云ひ添へた。

正敏は不思議だとは思つたが、その男には心當りもないので、取附く島もなくなつて、そのまゝ仕方なしにその家を出た。

暗い濠端の道を歩きながら正敏は妙に腹立たしい思ひに追はれていった。男と一緒に出ていつたと聞くと、まさかとは思ひながらも我れ知らず嫉妬が起つて、胸は耐らなく喘いで來る。今の自由なお絹の境遇を思ふと、正敏は心の底から彼女を信じてはゐながら、それでも修羅が燃え

てならないのであつた。

正敏は何處を當てに搜して歩く譯にもいなかいので、その晩は極めて不愉快な心持ちで到頭邸へ歸つてしまつた。

その翌朝起きてみると、正敏の机の上には一通の手紙が載つてゐた。それは男名前では書いてあつたが、正しくお絹から來たもので、彼は取る手遲しと封を切つて讀んでみた。

お絹はもう冒頭から昨日の不始末を詫びてゐた。突然國許から親類先のものが訪ねて來たので、それに連れられて三越へいつてゐて、つい時間をはづしてしまつたと、辯解してゐた。それで少し遲れたにも拘はらず濟まないと思つて、大急ぎで停車場へ驅けつけて見たが、もうそこには正敏もゐなかつたので、すぐすぐ家へ歸つた。家へ歸つて正敏が態々訪ねて來てくれたのを知つて、何ともお詫びのしやうがないと思つたと

いふやうなことが、幾度となく繰り返し繰り返し書いてあつた。

正敏はそれを讀むとどうした譯かいつもの手紙と違つて嘘が書いてあるやうに思へてならなかつた。言葉を盡し、委曲を盡して書いてあるにも拘らず、その手紙には何處かに信じられぬところがあつた。殊に停車場へ三十分ばかり遲れて驅けつけたといふのが變で、正敏は昨夜そこで時計と首引きをしながら一時間の餘も待つてゐた筈であつた。もし少しの時間の違ひなら途中でも出會してゐなければならない筈である。

そんなこんなはいつか正敏の胸に疑惑の影を宿させた。國許の親類といふのもしまひには少しづゝ變に思へて來るのであつた。

その翌日お絹は是非逢つて呉れといふので、正敏はひとつには前の晩の不首尾の理由も根本から搜り度さに逢ふ約束をした。いつものとほり牛込の停車場で六時に逢はふと返事をしてやつた。

その日はお絹は正敏よりもずつと早く來て待つてゐた。彼女は正敏の顔をみると心から懐かしさうに走り寄つて來て。

「ほんとに一昨晩は失禮いたしました。どうか御免遊ばして下さいましな。」と、云つて、唯正敏の意を迎へるやうにやさしい嬌態をしてみせた。

正敏は默つて合點いてゐた。

二人はそれから唯當てもなく代々木までの切符を買つて電車に乘つた。お絹は人目があるので正敏から離れて、向側の座席へ腰を下ろして、襟巻のなかへ顎を埋めながら終始俯向いてばかりゐた。その顏はつい四五日前に逢つたときとは違つて、ひどく面窶れがしてゐた。眼の色も不安さうに沈んで、頰の色の蒼さが眼立つてみえた。正敏にはそんなことなどもひどく氣にかゝつた。

代々木へ着くとそこで電車を下りて、彼等は新宿御苑の裏の暗い夜道へ出た。四邊には人の往來も途絶えて、空には星が降るやうに輝いてゐる。春近い夜風はひいやりと頰を吹いて、何處かで寂しいオルガンの音が聞えてゐた。

お絹は二人が並んで歩ける道へ出ると、突如耐へきれなくなつたやうに正敏の方へ身を寄せて、

「若樣。どうかほんとに一昨日の晩のことは御許しなすつて下さいましな。」と、云つた。

正敏はいろいろとその日のことを話して、逢へなかつた理由を詰問したが、その返事は手紙のなかに書いてあつたことゝ少しも違はなかつた。そしてそれ以外のことはひと言も云はなかつた。

正敏にはその辨解がどうしても腑に落ちなかつたが、併し彼にはそれ以上彼女を責めるだけの勇氣がなかつた。

二時間ばかり暗い道から道をさまよひ歩いた末、正敏はもうそろそろ歸らうと云ひ出した。お絹はそれを頼りながつて、

「まあだいゝぢや御座いませんか。私もう少し御一緒にゐたう御座いますわ。」と、甘えるやうに云ふ。

正敏は帶の間から時計を出してみて、

「もう九時だ。」と、口のなかで云つて、「こんなに歩いてばかりゐてもつまらないぢやないか。俺はもう草臥れちまつた。」

「では何處かへ參りませうよ。此節は坐つてしみじみお話を伺ふ機會がちつとも御座いませんのねえ。」と、お絹は恨みがましく云ふ。

正敏は何と思つたか、それと一緒に、

「ぢや今夜は歸りにお前の家へ寄らうか。俺はまだ一遍もお前の家へ上つたことはないんだから。」

お絹はそれを聞くと雀躍りして喜びながら。

「まあ、ほんとに被來つて下さいましな。私嬉しい。」と、情熱に耐へられぬやうに云つて、その正敏の胸へ縋り寄つた。

すぐ傍の森蔭を何處へゆく列車か、消魂しい汽笛を吹き鳴らしながら通つていつた。

二十三

日は月と過ぎ、いつしか蒸し薫る綠に飾られる初夏の頃となつた。

お絹と正敏の間には依然として蜜のやうな交情がつゞいてゐたが、併しお絹の擧動にはそれと同時に漸次と暗いところが出來て、それがひどく正敏をいらいらさせるのであつた。いつかは云ひ出さうと思つてゐながら逢ふとつい情にひかされて唇が堅くなつてしまふ。そん

な素振りを見せるからは、いくら顔色や口ではさも正敏ばかりに縋つてゐるやうにみせても、何か後暗いことがあるに相違ない。そして約束の日などにも往々にして來ないことがあつたり。又たとへ逢つてもひどくヒステリックになつてゐて、泣いたり拗ねたりするやうなことが漸次と度重なつていつた。正敏の憂悶は日に日に強くなつていつた。

そのうちにお絹はたゞならぬ體になつたことを頭到正敏に告白した。それを聞くと正敏は今更らのやうにはたと當惑してしまつたのであつた。善後のことを考へると、お絹に對する執着はありながら、折々は身を切られるやうな悔恨の念に責められずにはゐられなかつた。お絹の胎に宿つた子が毎晩のやうに夢のなかへ現はれて來るやうになつた。

或日のこと、その日は夕方の五時に逢ふことに前から相談がしてあつたにも拘らず、お絹は六時になつても七時になつても指定の場所へ姿をみせなかつた。その日は月の手當てを渡たさうと思つて持つて來たので正敏はそのまゝ歸る譯にもいかなくなつて、いろいろ考へた末、とにかく砂土原町の家へいつてみようと思つた。

眞暗な阪路を上つて、彼女の宿の前へ出ると、彼は溝際の樹蔭に立つて、お絹のゐる二階座敷を見上げた。そこの雨戸は堅く閉ざされてゐたが、それでも明取には電燈の光が射して、どうやら來客でもあるらしい氣勢がする。正敏は直覺で何となしにそんな氣がしたのであつた。

しばらく樣子を窺つた末、彼は思ひ切つて潜り戸を開けて中へ入つていつた。なかゝらはこの前の時の婆さんが取つぎに出て來て、正敏の顔をみると親しげにこつり笑ひながら、

「被來いまし。」と、云ふ。そして上框から顔を突き出して、さも當惑したやうな顔をしながら、「いゝ處へ被來つて下さいました。今清田さんの

ところへ變な男が來て、何んだか大層やかましく云つて居りますから、どうか貴方お上んなすつて見て上げて下さいまし。清田さんも大變に困つて被居るやうですから。」と、云ふ。

正敏はそれを聞くと悖乎として、その客の名をきくと、婆さんは唯痩せた風體の惡い男だといふばかりで名も何も聞かなかつたといふ。

正敏は强つてすゝめられるまゝに兎に角上框へ上つてみた。二階へ上る階段はすぐそのとッつきのところにあるので、よく耳を澄ますと二階では男の聲が何かしら口やかましく、ぶつぶつ云つてゐるのがかすかに聞えてくる、正敏はじいつと聞き入つてゐたが、その聲は誰れのともまるで見當がつかない。で、婆さんが二階へ正敏の來たことを報らせていかうとするのを態と押し止めて、足音を忍びながら自分でこつそり階段を四五段上つていつた。

漸次と樣子を窺つてみると、その聲の主はいつぞやの山川のやうに思はれて來る。いくら山川が執拗くてもこの隱家だけは見附かるまいと信じきつてゐたので、正敏は自分でその考へを打消しながら頻りに聞き入つてゐたが、二階座敷からはこんな言葉がきれぎれに洩れ聞えて來る。

「だつて絹子さん、そんなに君が僕を厭がつたつて、どうせもうかういふ關係になつてしまつた以上は仕樣がないぢやないか。もし此のうへ强つて僕の云ふことを拒絶するとなりや僕の方にも覺悟がある。」その聲はひどく酒氣を帶びてゐる。

「そんなことを云つたつて駄目ですわ。私は私はなにも心から貴方に從つた譯ぢやないんですから、あの時もさう申したとほり、私は決していつまでも貴方の御自由にやならないんです。」

「はゝゝゝ。君も隨分分らずやだね。これほど云つても分らないのかい。

まあよくものを考へてみたまへ。そんな強いことを云つたつてどうなるもんか。」

「いえ。いくらなんと仰有つても駄目ですわ。私は貴方に脅迫されて、もう遁げる手段がなくなつたためにかうなつたんです。それにそんな圖々しいことを云つて、……。」お絹の聲は躍起となつてゐる。

しばらくの間男の聲は途絶えたが、やがて今度はびりびりするやうな憤怒に滿ちた聲で、

「なんだと、默つてゐりやいゝ氣になりやがつて、圖々しいたあ何事だい。いくら脅迫されたからつて事實は事實ぢやねえか。それに愚圖々々云ふんならよし、僕だつて覺悟があるぞ。なにも頭を下げてかうして下さいと云ふにや及ばねえ。このいちまきをすつかり新聞記者に話をして、あの松平の若様のことを社會に暴露すりや、それでいゝんだ。記者の筆加減で君や若様のうへにや社會的に制裁が下される。その時僕は笑つて見てゐらあ。」

「そ、そんなことをなすつちや。私、私……。」

「なにをするんでえ。何をしようとかうなりや僕の勝手だ。散々人に恥を掻かせて置いて、泣きさへすりや男の心はゆるむと思つてる。もうその手は喰はねえよ。今にみてゐろ。酷え目に逢はせてやるから。」

さう云つて男は立ち上つたらしかつた。お絹は唯ひた泣きに泣いてゐる。

男はそのまゝ立ち上つてこつちへやつて來るらしかつた。正敏はこゝで逢つてはまづいと思つたので。すぐさま大急ぎで階段を下りて階下の木戸のところへ身を隱した。そして木戸の隙間から眼だけ出して見てゐた。

男はやがてどたばた階段を荒々しく降りて來た。そしてそこに置き捨てた外套をとつて着たが、きつと蛇のやうな眼を据ゑて二階を見上げてゐるその顔は紛れもない山川であつた。

山川はしばらくの間そこで様子をみてゐたが、二階からはお絹が降りて來る氣勢もしないので一層腹を立てたらしく、折柄。

「もうお歸りですか。」といつて奥から出て來た婆さんには返事もしずにそのまゝぷいと潜戸もなにも開け放しにしたまゝで戸外へ飛びだしていつてしまつた。

婆さんは呆氣にとられたやうにそのあとを閉めて、

「ほんとに風の惡い人だよ。いつでも來る時にやお酒に醉つぱらつて、あんな好かない男つちやありやしない。」と、態と正敏に聞えるやうに云つた。

正敏はやつと木戸から出て、

「ねえ、小母さん。あの男は始終來るんですか?」と、そつと聞いてみた。

婆さんは幾度か合點いて。

「えゝ、もう毎日のやうにあゝしてお酒を飲んぢややつて來て、何かしきりに清田さんに喰つて懸つてゐますよ。清田さんも家へ對して氣の毒だといつて、よく外へお連れ出しになるんですけれど、私やそれが却つてお氣の毒でねえ。」

正敏はそれを聞くと顔色をかへて、そのまゝ階段をうへゝ上つていつた。そして開け放してある紙襖のところへ立ちながらそつと間内を覗き込んだが、電燈のすぐ下のところにはお絹がしかけた仕立物の上へ耐力もなく突俯して、聲を忍んで泣き歔つてゐる。

正敏はしばらくの間その姿をじいつと見まもつてゐたが、やがて
「おい、絹。」と聲をかけた。
初めの聲は聞えなかつたか、お絹は顔もあげなかつたが、二度目に呼ぶと彼女は電氣にでも打たれたやうに、ついと眞紅に泣き膨した顔をあげて、
「まあ、若樣。」と、云つたぎり突如彼の方へ摺り寄つて來て、その足許へ突俯して激しく泣きだした。そして涙の隙に、
「若樣。いゝところへ來て下さいました。私、私もう死に度う御座います……。」と、歇りあげながら云ふ。
正敏は默つて口をきかなかつたが、やがて冷かな聲で、
「おい、絹。俺は今のことをすつかり聞いてしまつたぞ。お前も怪しからん女ぢやないか。俺はもう何も云ふことはない。お前の方でよく反省してみろ。」
正敏はさういつて、いきなり身を飜へして又階段を下りようとした。
お絹は狂氣のやうに起き上つて來て。
「若樣。若樣。そりや餘りなお言葉で御座います。まあ、お待ちなすつて下さいまし。私すつかり打明けてお話いたしますから。まあ、お待ち遊ばして……。」
正敏はその手を振り切つて玄關へ下りると、それなり下駄を突懸けて後をも振顧らずに戸外へ出ていつてしまつた。
お絹の泣く聲はいつまでも玄關のところで聞えてゐた。
我れを忘れて濠端の通りへ出るとそこの電車道を蹣跚として歩いてゆく男があつた。とみるとそれはさつきの山川で、まるで打蹌めされたやうな恰好をしながら、電車の停留場の方へ歩いてゆく。

正敏は姿をみられては一大事と思つたのですぐさま踵をめぐらして、市ケ谷見附から麹町の方へ入つてしまつた。

眞暗な土手縁の道を歩いてゆく時、彼の頭腦は旋風のやうに亂れて、もう何を考へる餘裕もなく、唯熱い涙が留途もなく頰に流れ落ちて來るばかりであつた。

その晩正敏は初めて惡夢から覺めたやうな心持ちになつたのであつた。

二十四

その翌日、お絹からは長い長い手紙が正敏の許へ屆いた。それでみると彼女はもう狂氣したやうに昨夜の出來事を悲しんで、さうなるまでの成り行きを事細かに書いて寄越した。

昨夜も山川の口から聞いたやうに、お絹と山川との間には人に話せない事情があつたに違ひない。それも切ない苦悶の後にもうどうすることも出來なくなつて、ついかう云ふことになつたので、彼女としては全く止むを得ない出來事なのであつた。

山川は正敏との間の關係を探知するとそれをいゝ種に、散々にお絹を脅迫した。もし彼に從はなければ今迄の事實と現在の二人の關係を、すつかり社會へ暴露してしまふといつて日夜彼女を恐喝した。

以前と違つてお絹は人目を忍んで正敏の世話になつてゐる體なので、世間といふものを恐れることは非常なものであつた。正敏からも、そのことばかりは口癖のやうに云はれてゐるので、彼女は細心に注意に注意を重ねてゐた。それだのに今もし新聞にでもこんな關係が書かれたとしたら、彼女はどうなることであらう。氣の弱い彼女は夜となく晝となくそれを心配して、どうかして遁れる血路を見出さうとあせつた。その時

に思ひ切つて、それを正敏に話してしまへばよかつたのであるが、もしやそんなことから正敏の疑ひを買つたり、嫌氣がさしたりするやうなことがあつては可けないと思つたので、彼女は到頭自分ひとりの胸に秘めて死ぬほど苦しんだのであつた。

お絹は我れと我が身の縛めにかゝつて、到頭進退谷まつてしまつた。今酷い目に逢はされて、自分ひとりのみか正敏にまで迷惑を及ぼし、ひいては兩人の仲を散々に打壞はされてしまふよりもいつそこゝで自分の身を投げだして、反對に山川を操る方がいゝと考へた。それは彼女としてはいかにも無理のない話しで、意志の弱い女の身としてはありがちな考へであつた。彼女は遂に決心して山川の云ふ通りになつたのであつた。

その當座は事が頗る巧く運んで、お絹も正敏に對する良心の苛責はありながらそれでも幾らかほつとしたのであつた。併しそれもほんの束の

間で、山川は勝利者の位置に立つと漸次と我儘が出て來て、金の無心を云つたり又は嫉妬から態と正敏との間に邪魔を入れるやうなことばかりしだした。

お絹はその時になつて又身を切られるやうな悔恨と、良心の激しい苛責を感じずにゐられなかつた。もう取返しのつかないことをしてしまつたのを、初めてその時になつて知つたのであつた。それのみか彼女はもう唯ならぬ體にさへなつてゐるのである。

彼女の苦悶は日一日と募つていつた。そしてこんなことをしてゐればいつか一度は正敏にもすべての事實が暴露して、彼にさへ捨てられる日が來るのを彼女は明らかに感知してゐた。不安な恐怖に充ちた日は毎日のやうにつゞいて、彼女は丁度幾千仞とも計り知られぬ暗黑な谿に望んだ斷崖の縁に立つてゐるやうな心持ちで生きてゐた。

そこへ突然昨夜の出來事が起つた。もう萬事は休したのであつた。

お絹はさうした事情を細々と書きしるしてまたかう書き添へてゐた。

「それと申すも皆私の不束なる心より起り候ことにて御座候まゝ、萬事はもはや若様の御思召しのまゝに被遊度く、たとへ如何やうに仰せられ候とも、もはや私にとりては露お恨みに存ずべき節も御座なく、せんなきことゝ諦めるより外は御座なく候。此身は最早一死を覺悟いたし居候へば、生くるに詮なき身をながらふるもよしなき業と存じ、若様にお別れ致せし上は潔く覺悟を極め可申、私の悔悟の死によつて何卒身の罪咎幾重にも御許し下され候やう呉れ〳〵も御願ひ申上まゐらせ候。かほどの御高恩を受けながら獣にも劣りし身の罪恐ろしく、それを思ふにつけても恨めしきはあの山川にて御座候。私こと世を早め候上は生きかはり死にかはりこの恨みを晴らし可申、それも若様への御詫びの種とも

相成可申候……。」

正敏は幾度かその手紙を繰返して讀んでみたが、しかしもう彼にはかう自白されて了へば、再びお絹の罪を許してやるだけの寛容は起らなかつた。人もあらうにあんな賤しい山川に關係をした女、それをどうして自分の戀人として關係をつづけていくことが出來るであらうか。たとへそれが自分のためになされたことであつても、人一倍男性の誇りをもつてゐる彼には到底忍び難い屈辱であつた。

彼はそれから二三日の間そのことばかり考へあぐねてゐた。ともすると絶ち難い愛着の念にひかされて、どうかしてもう一度逢ひ度い、逢つてよく事情を聞いてみたならば、又自分に承認の出來るやうな理由を發見するかも知れぬ。弱い感情はしきりに正敏を誘惑したが、彼は到頭その誘惑に打克つてしまつた。そして彼は涙に暮れながらお絹との間の處

置を考へつゝ思はず幾日かの日數を過ごしてしまつた。
お絹と正敏との間の關係が斷絶する日は漸次と近づいて來た。そして
それを早めたのは突然湧き起つた或一大事であつた。
或る日のこと、正敏は大學から歸つて來るといつものやうに書齋へ引
籠つて、ぼんやり暮れてゆく日の色を眺めながらお絹のことを思ひつゞ
けてゐたが、そこへ足音を忍ぶやうに老女のお國が入つて來て、唯なら
ぬ顏をしながら、
「あの若樣。一寸貴方樣へお話し致さなければならないことが御座いま
すんですが……。」と、云つて、後の扉を堅く閉ざした。
正敏は何ごとかと思つて、眼を据ゑながら、
「何か？」と、訊きかへした。
と、お國はそのまゝ正敏の傍へ近寄つて來て、帶の間から四つ折りに

した紙の綴ぢたのを引出して、それを彼の机のうへゝ置きながら、
「若樣。どうか一寸此れをお讀み遊ばして下さいまし。」と、きつとした
眼つきで云ふ。
正敏は何氣なく取上げてみると、それは何ごとか細々と書き記した原
稿用紙のとぢたので、讀んでみると思ひも懸けぬお絹との交情を新聞記
事體に書きつゞつたものであつた。題名も『若殿樣と小間使』としてあ
る。
正敏は悸乎としてそれを持つた手を打慄はしながら、
「お國、これは一體どうしたんだ？」と、低く叫んだ。
お國は態と落着いた顏になつて、
「若樣。私實はこのことに就きまして、もう先達からうすうす氣づいて
は居りましたんで御座いますけど、まさかかうまでなつてゐようとは思

ひませんもんで、そのまゝに致して置きましたのですが、若様、これは一體どうしたことなので御座いませう。若様のやうにもない、餘りなお仕打ちぢや御座いませんか。」さういふ眼にはいつか涙が浮んで來る。

お國の口から聞くと、今から一時間ほど前に洋服を着た風の惡い男が突然へやつて來て、東京日報といふ名刺を出して是非執事に逢ひ度いといふ。岡田が出て逢ふとその男はこの原稿を出して、御當家の名譽に拘はること故どうかこれを買つて貰へまいかと强請にかゝつたのであつた。

岡田は餘りのことに吃驚して奥へは云つてゆく譯にもいかないので、さしづめお國に相談した。そして二人でいろいろ評議した末、何はともあれこんなものが世上に發表されては一大事なので、到頭この原稿は向ふの云ふなりに買ひ取つて關係を絶つたのだといふ。

お國はそれを話してしまふと、またきつとした顔になつて、

「若様、これはお覺えのないことぢや御座いませんのでせう？」と、詰ぢるやうに云ふ。

正敏はもうかうなつた以上はいくら隱しても仕様がないので、

「いや、どうも實にお前達に對しても面目のないことをしてしまつた。つい俺の考へ違ひからかうなつてしまつて、……」

「で、なんで御座いますか、これに御座いますとほりお絹は懷姙して居りますので御座いますか？」

正敏は眞蒼な顔になつて合點いたが、

「もうかうなつたうへは已むを得ん。どうかお前達のいゝやうに處置してくれ。」と、哀願するやうに云つて、そのまゝ首を垂れてしまつた。

お國はそれから涙ながらに苦諫をして、一時間ばかりたつとやつと書

齋を出ていつた。

その翌日お國は執事の岡田と談合した結果、奥へは知れないやうに事の處置をつけてしまふつもりで、晝からお絹の宿へたづねていつた。そして正敏との關係はこれ限りといふ宣告をして、お腹のお子様がお生れになる迄は邸から相當の手當てをやるし、又お生れになつたうへは何とか處置をつけるとして、すぐさまお絹に歸國を強ひたのであつた。

お國が歸つて來てからの話によると、お絹は唯死ぬ死ぬと云つて泣くばかりでどうにも始末に困つたが、とにかくそれをやつと宥めて、近々うちに歸國させる手筈にして來たといつてゐた。

お絹の身のうへには重疊たる波瀾が卷き返して來たが、彼女の運命は何處まで悲しい暗い路に踏み迷つてゆくことであらう？

二十五

お絹が愈々決心を極めて歸國しようと思ひ立つたのはそれから十日ばかり後のことであつた。彼女はもうその頃ではすべてを思ひあきらめて、このうへは唯運命の波に身を任せ、せめて腹に宿つた戀しい正敏の兒だけでも無事に育てゝ悔恨の多いこれからの生涯を送らうと思つてゐた。故郷へ歸るのは死にまさる苦痛ではあつたが、併し今の場合それをしなければ松平家からは世話をして下さらぬといふし、自分ひとりではどうすることも出來ない體になつてゐるので、彼女は涙をのんで歸國するより外にもう仕様がないのであつた。

四月の末の或日、お絹は僅かな身のまはりの道具だけをひきまとめて大きな信玄袋に入れそれ、を片手に提げてしよんぼり上野驛の入口を入

つていつた。廣い停車場の建物のなかには明るい電燈が煌々と輝いて、石敷の床に響鳴する下駄の音は、いかにも氣忙はしいどよみをつくつてゐる。發車間際なので旅客の數は刻一刻に增して、その間を赤帽や驛員が足を宙にして往つたり來たりしてゐる。

お絹は旅をする人の何とも云へない賴りないやうな心細さに包まれながら、そのまゝ三等の待合室へ入つて發車時刻の來るのを待つてゐた。冷たいベンチに腰を下ろして考へてゐると、彼女はどう考へなほしても歸國する氣にはなれない。こんな體でどうして母親に顏を合はせることが出來よう。そればかりではない、その後は頓と打絕えて正敏にも逢はないので、譬へ今こんな境遇に落とされても、彼のことだけはどうしても忘れることが出來ないのであつた。あゝは云つてゐながら、すべてはあのお國や執事の岡田の仕組んだ仕業であつて當人の正敏は子までなした自分をさうまで無殘に思ひ捨てゝしまふ譯がない。それに別れるつい最後の日まで正敏は、あんな優しい言葉を自分にかけてゐたではないか。さう思ふとお絹はどうしても間に立つものが二人の仲を割いてゐるやうな氣がして、絕ち難い未練が殘つてならないのであつた。

發車時間になつたのでお絹はしぶしぶ立ち上つて、そのまゝ切符を買ひに出ていつたが、その時ふと人込みのなかゝら、

「お絹さん、お絹さん。」と、呼ぶ聲が聞える。

吃驚して振り顧ると、突如お絹の方へ驅け寄つて來るのは思ひも懸けぬおていさんであつた。小田原以來絕えて久しく出逢はなかつた間に、彼女はもう見る影もなく零落してしまつたやうな姿になつて、顏色も蒼ざめ、髮もそゝけて體には見すぼらしい肩のぬけたやうな着物を着てゐる。

お絹は二度吃驚してしばらくの間は口もきけないやうに默つてその姿をみてゐたが、おていさんは何と思つたか涙ぐんだやうな眼色になつて、

「お絹さん、ほんとにしばらくでしたわねえ。その後は御無沙汰をしてしまつて、……」と、口籠りながら云つて、「妙な處でお眼にかゝりますわねえ。貴方何方へか被往るの？」と、お絹が手に提げた信玄袋をみながら云ふ。

お絹にとつては憎さも憎いおていさんではあつたが、併しかう云ひかけられてみると、まさか返事をしない譯にもいかないので、やがてお絹は冷たい聲で、

「あの私、今度少し都合があつて此れから故郷へ歸るところですの。」と言葉少なに云ふ。お絹の心ではどうせ今度のことに就いては、彼女も山川から逐一聞いてゐるだらうと思つたので、少しは氣恥かしい氣もしたのであつた。

おていさんは國へ歸ると聞くと吃驚したやうに眼を据ゑて、

「まあ、貴女佐山へお歸りなさるの？」と、云つてまじまじお絹の顏を見詰めてゐたが、やがてさも羨ましさうに、「私、そんなことを伺ふとほんとに羨ましう御座んすわ。何か御用でもあつてお歸りになるんですか？」

「いゝえ、別に用もないんですけど、……」お絹は先を云ひ澁つて、「貴女あの山川さんからお聞きになつてゐるんでせう？」と、態と皮肉な眼色で云ひ返す。

おていさんは何んにも知らないやうに、

「え、山川さんから？」と、云つたが、急に悔恨の念に耐へないやうな顏になつて、「あ、いつぞやは小田原でほんとに失禮いたしましたわね

え。私、あの後山川さんと喧嘩して、もうすつかり絶交してしまひましたの。あれから私一度も逢ひませんの。あんな酷い人はありませんのねえ。」と、いふ。

お絹は思ひがけないことを聞くので、おていさんの心持ちを疑ひながら默つてゐたが、おていさんはそれをみると耐らなくなつたやうに顔を曇らせて、

「ほんとに私、あの人に使はれて、今迄に隨分あなたには申譯のないことをしました。私いつからかお眼にかゝつてお詫びをしようと思つてゐたんですけど、あれ以來、貴女が何處に被居るか分らなかつたもんですから、ついそのまゝになつてしまひましたの。私この頃になつてやつとあの人に酷い目に逢はされてゐたのが分つて來たんですわ。」と、涙聲で云ふ。その言葉の底には眞實がひゞいてゐた。

それをみるとお絹もやつと今のおていさんの姿と、そのなる果てが分つたやうな氣がして、憎いとは思ひながらも何となく可哀相な氣もして來た。

おていさんはそつと袖口で涙を拭きながら今度は氣をとり直したやうに、

「あの、お絹さん。貴女何時の汽車でおたちなさるの？」と訊く。

お絹は時計をみあげて、

「私、あの七時の汽車に乘らうと思つてゐるんですけど……。」

「まあ、七時つて云ふともう廿分ばかりしきあありませんのねえ。」おていさんはさも落膽したやうに云つて、「折角お眼にかゝれたんですから、私いろいろお話しもし度いと思ふんですけど、それぢやとても駄目ですわねえ。私このまゝお別れしてしまへば、もう一生貴女に誤解されて

しまはなけりやならないし、ほんとにそれが何よりも口惜しくてなりませんわ。」と、又涙聲になつてゆく。

お絹はその言葉がなにかしら可哀相でならなかつた。さうなるとどうかして山川と彼女の間の今迄の關係も知り度く、かうして停車場で出遇つたのも何かの因緣であらうといふやうな氣がして、何となく別れるのが辛いやうな氣になつて來た。もとを云へばこのおていさんとも學校友達で、決して惡い人間でなかつたのは彼女とてもよく知つてゐるので、その時分のことなども何くれとなく思ひ出されて來た。

お絹はやがて言葉を改めて、

「あの私、實を云ふと此の次の汽車にしてもいゝんですわ、さう急にたたなければならないと云ふんでもないんですから。」と、云ふ。どつちかと云ふと彼女とても此の場合、一時間でも長く東京にゐたいのであつた。

それを聞くとおていさんは躍りあがるやうに喜んで、

「まあ、此の次の汽車つて云ふと十一時の夜行ですわねえ。もし御都合が出來るんならさうなすつて下さいましな。私、さうすればすつかりお話しも出來ますし、それに又國の方へも、お言傳けをお願ひし度いこともありますから。」と云ふ。

お絹はやがてさうきめて、信玄袋は驛の一時預けへ預けて、やがて二人は何處へといふ當てもなく停車場の構外へ出た。

上野の山下通りには淺草あたりへ遊びにいつた歸りらしい人の群がうようよと動いて、輝やかしい燈影の溢れた町筋を電車が消魂しい警鈴を鳴らしながら氣忙はしさうに疾驅してゐる。さうかと思ふとその間には自働車がさつと前燈をきらめかして駛りすぎていつたり、重苦しい轍

の音をたてながら郵便馬車が通つていつたりする。軒を並べた牛肉屋や料理屋では客を呼び込む聲が賑やかに聞えて、食物を煑たきする匂ひが往來までも溢れ出てゐる。

お絹とおていさんとはなるべく人目を避けて上野の公園の方へ入つていつた。花の過ぎたあとの樹立ちには白熱燈の光が寂しく瞬いて、そこらに散歩して歩く人影も疎らであつた。

おていさんは暗い樹影へ入ると耐らなくなつたやうにお絹の方へ摺り寄つて、

「でもお絹さん、ほんとに今日あなたにお目にかゝれるなんて不思議ですわねえ。これも神樣のお引合はせかも知れませんわ。」と、云つて急に激しく啜り泣きをしだしながら、「私も實は此頃になつて國へ歸り度くて耐らなくなつたもんですから、晩になるとかうしていつも停車場へいつて汽車に乘る人を見てゐるんですの。それが樂しみなんですわ。」と云ふ。

お絹はさう云はれると耐らなく自分も胸が迫つて、

「まあ、貴女國へ歸り度いんですか、停車場へ汽車に乘る人をみに來るなんて隨分ですのねえ。」さう云ふ言葉はいつか涙に打濕つて來る。

二十六

二人は鶯谷のうへまで歩いて來ると、何方からともなくそこの冷たいベンチへ腰を下ろした。いづれも生活の切なさに疲れきつたといふ風であつた。もう歩く道にも惱むやうな心細さが、二人の胸にしみじみと湧いてゐるのであつた。

すぐ眼の前には淺草から千住吉原へかけて、廣々とした燈火の海が淡い夜霧の底にひろがつてみえる。淺草公園に櫛比する活動小屋のイルミ

ネーションは空の一部に燃えるやうな殘映をうつして、じいつと耳を澄ますと大都會の夜の叫びが、そこからもの悲しく湧き起つて來るやうにみえる。それは恐ろしい魔の叫びであつた。さまざまの罪惡を釀し、純な心を惑はす誘惑の叫びであつた。今迄そのために救ふことの出來ない墮落の淵へ投げ込まれた幾多の精靈が、今夜の空に向つて悲しげな聲を振絞つて慟哭してゐるのであつた。

おていさんはその燈火の海をじいつと涙の眼で見下ろしながら、悔恨の情に耐へないやうに、

「ねえ、お絹さん。私ほんとに今迄貴女に對しては詫びのしようもないほど失禮なことばかりしました。どうか許して下さいまし。いくら許せといつたつて、貴女が許して下さるかどうだか分りませんけど、それもこれも全く私が山川さんにだまかされてゐたからなんです。私それを思ふと口惜しくつて口惜しくつて堪らないんです。どうして私はこんな馬鹿なんでせう。」と云ひながら激しく啜り泣きをしだして、その涙の隙に山川のことを細々と語り初めた。

つまり山川はこのおていさんを自分の道具に使つてゐたのであつた。もともとおていさんといふのは極く人の好い方だつたので、それが東京へ出て來て惡摺れがしたのであるから、見かけはいかにも惡さうに見えても、心にはまだ昔ながらの氣の弱いところが殘つてゐるのであつた。山川がもう生命も何も擲つてお絹に戀してゐると信じきつてゐたので、おていさんは今迄どうかしてお絹の心を山川の方へ導かうとそればかり苦心したのであつた。そのためには手段を選ぶだけの深い思慮もなく唯山川の命ずるがまゝに働いてゐたのであつた。

その間におていさんは山川の友人のひとりに引懸つて散々に弄ばれ

たうへ、體につくものは總てその男のために取られてしまつた。山川も最初は氣の毒がつて何かと力にもなつて呉れたが、もうお絹の方がいよいよ駄目だとなると急に態度が一變して、彼は今度はまるで木で鼻をくゝるやうにてんでおていさんの云ふことなどには耳もかさないやうになつてしまつた。そして二人の間はそれから漸次疎々しくなつて、それを強いてまつはりついていかうとすると彼は怒つておていさんを打擲したりした。それは丁度お絹が小田原から歸つて來た時分の出來事であつた。

おていさんは今更のやうに恐ろしい男心を恨んでもみたが、もうそれは所詮甲斐のないことであつた。境遇が漸次と苦しくなつてしまふとやがておていさんの心には激しい悔恨の念が湧て來た。故郷からはもう送金の道も絶えてしまふ。會社の事務員として働いてゐた昔が戀しくな

つてどうかして口を糊するだけの金を得る手段もと思つて捜してみたが、もう今更となつては唯一人として相手にして呉れない。

悔恨の後には恐ろしい自暴自棄がやつて來た。明日のことにも困るやうになつたので、おていさんは募集廣告をたよりに或るよくない看護婦會へ入つてみたが、それが猶一層彼女を墮落の淵へ落とす階段となつて彼女はついその手引きでうかうかと賤しい稼業に落ちていつた。その末が到頭今日の有樣になつてしまつたのであつた。

おていさんは包まず隱さずすつかり話してしまふと身も世もあられないやうに泣き歇つて、

「ほんとに私こんな悲しい身のうへにならうとは、今の今まで少しも思つちやゐなかつたんです。貴女をあんな目に逢はせた罰と思へば仕方がないんですけど、私ぢつと胸に手を置いて考へてみると、こんな悲しい

ことは御座いませんわ。」と、血を吐くやうな聲で云ふ。

お絹はそれを聞くと自分も貰ひ泣きをしながら、

「ほんとにねえ、私、貴女がそんなお心で被居るとはちつとも知らなかつたもんですから、今迄はひどく貴女を恨んでも居りました。併しさうと伺つてみるとほんとにお可哀相でならないんですわ。」

「いゝえ、もう貴女からさう仰有られると私どうしていゝか分りません わ。何も彼も私が惡いんです。今のこのざまはほんとに身から出た錆なんです。」と、おていさんは激しく泣きつゞけながら「でも私、それやこれやを思ふと、お絹さん、貴女がお羨ましくつて仕樣がないんですわ。貴女はよく誘惑にお勝ちなさいました。私それを思ふとほんとに貴女の強い心が羨ましくつて仕樣がないんですわ。」

それを云はれるとお絹は穴へでも入り度いほどだつた。強いよりも餘りに弱い自分の心ざまから自分は今かうして唯ならぬ體を思ふ男からも捨てられて、寂しく國の方へ歸つていかなければならないのである。あなんといふ憐れな二人の運命であらう。お絹はそれを思ふと耐らなくなつて、

「おていさん、貴女は何んと思つて被居るか知れないけど、私も、私も矢張り貴女と同じやうにあの山川に酷い目にあはされてしまつたんですわ。私あの山川のために今こんな苦しい羽目に落ちてしまつたんです……。」と、我慢が出來なくなつたやうに云ふ。

おていさんはそれを聞くと急に泣き聲をやめてじつとお絹の顏をみながら、

「え。なんですつて？、貴女もあの山川のために？……」

お絹は涙を拭きながら聲を呑んで、

「詳しくお話しゝなけりや分りませんけど實は私あの人のために到頭散々な目に逢はされてしまつたんです。貴女はまだ御存知ないでせうけどほんとにあんなひどい人はありませんわ。」

お絹はさう云ひながらやがて今迄のことをすつかり打明けて話しだした。正敏との關係から、それから山川に脅迫されて到頭自分の身を安全にするために彼の心に從つたこと、それが却つて仇になつて今ではこんな身のうへに落ちてしまつたこと、さう語つてゆくうちにお絹の言葉は幾度となく涙に遮られたのであつた。

おていさんには聞けば聞くほど意外なことばかりであつた。彼女はいつか呆然としてその物語に聞き入つてゐたが、それがすむと彼女はいきなりお絹の膝へ泣き崩れて、

「ほんとにそんなお話しを伺ふと私世の中が恐くつて恐くつて耐らなくなりますわ。さぞまあねえ、私貴女のお心のうちを思ふとどんなだらうと思つて……」

お絹は涙に暮れながら、

「でも私もうすつかり斷念めてしまひましたの。今になつてどう悶いたつてもうどうせなるやうにしきやならないんですから、私もうこのまゝ默つて國へ歸つてしまはうと思ふんですわ。國へ歸れば又何とか道もありませうし、……」

「お絹さん。私それが何よりもお羨ましいんですわ。私なんぞは國へ歸り度くつても、もうとても歸れないんです。それもこれも皆私が自分でつくつた運命なんです。ほんとに私此頃になつていつそ死んでしまはうかと思ふことが幾度あつたか知れないんですわ。」

お絹は涙を拭きながら、

「おていさん、どうかそんなことを仰有るのはよして下さい。死ぬといふことは私だつてもう毎日のやうに考へてゐるんです。ひと思ひに死んでしまひさへすりやあこの苦勞はありませんし、……」

おていさんはお絹の手をじつと握りしめて、

「ほんとにねえ。」と、唯ひと言云つたが、その言葉には強い強い力が籠つてゐた。

お絹はそれを聞くとふいといつぞや上野の山下で、あはや線路の露と消えてしまはうとした晩のことを思ひ出した。涙は先から先と湧いて來て、今身を躍らして死の淵へ投じようとするその瞬間の感じが、はつきりと心に浮んで來た。

お絹は暗い山下の方をおづおづ見降ろした。そこには數限りもない線路が網の目のやうに交錯してゐるやうにみえて、そのうへを殺人鬼のやうな恐しい姿をした機關車が、黑烟を吐いたり汽笛の絶叫をあげたりしながら、轢轆として疾驅してゐる。そこは生命を束の間に死の境へ送る煉獄のやうなものであつた。お絹はそれを見ると悚然として戰かずにはゐられなかつた。

おていさんはやつと顏をあげて、

「でもお絹さん、私貴方にこれだけ申上げたんで、ほんとに胸が透きましたわ。貴女さへ分つてゐて下されば私もう思ひ置くことはないんです。かうしてゐれば私きつと近い間にどうにかなつてしまふでせう。その時にもし貴女にお眼にかゝつてゐなかつたらどんなに殘念だか知れませんわ。」

お絹はそれを抑へて、

「おていさん。貴女ひよつとしたことから短氣でもお起しになつちや可

けませんわ。どうせ人間ですもの、一度は死なゝけりやならないんですけど、……」と、そこまでは云つたが、あとは涙に包まれて、云ひ度い言葉も口へは出て來なかつた。

おていさんは默つて唯しくしく啜り泣くばかりであつた。

夜が更けるに從つて四邊にはしつとりとした寒さが迫つて來る。淺草の灯もひとつひとつに消え落ちて、深い夜の闇は漸次と大都會の空を掩つて來る。幾多の罪惡や誘惑や傷害などを敢てする恐ろしい大都會は、今惡念に滿ちた眠りに就かうとしてゐるのである。

おていさんはそれをみるとふいと氣がついたやうに、

「お絹さん、もう汽車の時間ぢやありませんの。」と、お絹の方へ顏を近々と寄せて訊いた。

お絹は何故か返事をしない。

と、みると丁度際涯もない蔓の波の彼方には瘴氣のやうな夜霧の底に、眞紅な大月がしづしづとのぼつて來た。

二十七

その晩、二人は到頭別れられなくなつて、お絹はその日を延ばしてしまつた。夜更けてから何處へ行く當てもないので、二人はそのまゝ旅に出たやうな心持ちになつて停車場前の安宿へ泊つてしまつた。そして夜もすがら薄い煎餅布團にくるまりながら果敢ない運命を語り明したが、曉方になつてお絹は冷えたせいか激しい腹痛に惱んだ。腹に宿つた子のことを思ふと、彼女は猶一層今の身のみぢめさを感じずにはゐられなかつた。

その翌日、二人は晝頃まで此れから後の身の振り方を相談しあつたが

おていさんが泣きながら哀願するので、お絹は頭到自分の手薄な財布のなかゝら旅費を立て換へてやつて、おていさんも一緒に歸國の出來るやうにしてやつた。おていさんは躍りあがつて喜んで、お絹を救ひの神様だと云つてその膝に縋つて泣きに泣いた。

おていさんはさう定まると一先今ゐるところへ歸つて荷物をまとめて來るからと云つて、午飯をたべるとすぐに宿を出ていつた。そして夕方になつてやつと小さな柳行李をひとつ持つて眞蒼な顏をしながら慌たゞしく歸つて來た。

おていさんはお絹の顏をみると坐りもしずに、

「ねえ、お絹さん。大變なことが出來ましたの。私、今ゐる家に少しばかり借金があるもんですから、どうしても私の體を自由にさせて呉れませんの。それで、私こっそり遁げて來たんですがもしひよつとかして

誰れかゝ追驅けてゞも來るといけませんから、兎に角大急ぎで汽車に乘つてしまひませうよ。さうすれば分りつこありませんから。」と云ふ。

お絹もさう云はれるとじつとしてゐられなくなつて、

「まあ、そりや大變だ。ぢやすぐに停車場へ參りませう。」と、云つて大急ぎで勘定を濟まして、二人はそのまゝ荷物を提げて停車場へ驅けつけた。

折柄丁度水戸行の列車が出かゝつてゐたので、彼等は前後の見境ひもなく切符を買つてそれへ乘り込んだ。行けるところまで行つてそこで本線へ乘り繼げばいゝので彼等は或室へは入つたものゝ、發車するまでは もしや追手がかゝりはしまいか氣が氣ではなかなつた。

列車はやがて一聲の汽笛を殘して上野の停車場を離れた。北千住まで來るともう東京の空も見納めである。その日は妙にどんよりと曇つてゐ

て、今にも泣き出しさうな空合だつたので、漸次と後へ離れてゆく東京の甍はまるで大きな墓場のやうに灰ばんでみえた。もうこれから先は二度と再びこの大都會へも歸つて來られないのであるまいかと思ふと、さすがに後髪をひかれるやうな思ひがしたが、しかしもうそれは到底自分達の力ではどうにもならない運命なのであつた。

おていさんは人目も恥ぢず、車窓に顔を押し當てゝ頻りに泣いてゐたが、やがて、

「お絹さん。」と、呼びかけて、今度は情けなさゝうな聲になりながら、

「お絹さん、私ほんとに嬉れしいと思ひますわ。昨日までは私のことを憎い奴だと思つて被居つた貴女のおかげで、私はかうして懐かしい故郷へ歸れるんです。それを思ふと私、なんだか貴女に濟まないやうな氣がして、……」

んお絹はそれを押へて、

「もうそれだけは云はないで下さいましな。すつかりお話しを伺つたうへは何んにもお互に云ふことはないぢやありませんか。過ぎ去つたことは過ぎ去つたことです。もう何んにも云つちや厭ですわ。」

おていさんはそのまゝ押默つてしまつた。

お絹は愈々東京の郊外を離れてしまふと何かしら松平の正敏のことが思ひ出されてならなかつた。今頃はどう遊ばしてゐることだらう。この私が今かうした悲しい心持ちで故郷の方へ歸つていくことを知つてゐて下さるだらうか、それにしてももうこれから先は一生お目にかゝれないとなるとその悲しさはどうあらう。いくら情ないお仕打とは思つても、彼の方に對する戀しさ、懐かしさだけはどうしても忘れることが出來ないのである。あの眼、あのお優しい口振り、それを思ふとお絹の眼には

又新たな涙が湧いて來ずにはゐなかつた。

おていさんはその涙をみると何と思つてか强い嘆息をついて、

「ねえ、お絹さん。私達が國を出る時には、まさかこんな姿で歸らうとは夢にも思ひませんでしたわねえ。」と、心の底からしみじみ云つた。

お絹はそれを云はれると急に故郷に殘した母親のことを思はずにはゐられなかつた。今日か明日かと東京へ迎へられる日を待ち暮らして、あの母親はどんなに憂い辛い日を送つてゐたことであらう。それに今自分は殘殘の體を抱へてその母親の許へ歸つていかなければならないのである。自分としてはどうして母親に合はせる顏があらう。夙夜ほの暗い行燈の灯影で糸車を廻はしながら、自分の行末を案じてゐてくれる母親の老い疲れた面影は、やがて髣髴としてお絹の眼の前に立現れて來た。お絹はその幻影に身を悶えて泣いた。

「お母様。ほんとに濟みません！」その聲は唇までは出て來なかつたが、骨にしみ肉に徹つていつた。

列車が水戸へ着くと、二人はそこで下車して本線の夜行が來るので待ち合はせた。いかに腹が空いても贅澤の云へない今の體なので、彼等は町へ出て蕎麥をたべてやつと腹を充たしたりした。

十一時の夜行が來ると彼等は又それへ乘つて寂しい旅をつゞけた。そのひと夜は車中で明けて、その翌朝早く列車は夢寐にも忘れ得ぬ佐山の町へ近づいていつた。

曉方から降り出した雨はさして降りもさりもしずにしとしと車窓を打てゐた。佐山の一驛手前までくると二人は寢足らぬ眼に涙をたゝへて車窓から倦かず四邊のなつかしい景色を眺めてゐたが。そのうちに忘れもせぬ山が見えて來る。川が見えて來る。とある森影にはお絹の生れた

慈雲寺の甍が、昔ながらの姿で降る雨にかさくれながら見えて來た。
お絹は嬉れしさと悲しさに言葉を奪はれてたゞぼんやり眼に据ゑて、漸次と近づいて來る佐山の町を見つめてゐた。
列車は消魂しい汽笛を吹き鳴らしながら町へ入つていつた。そしてそれから間もなく寂しい停車場のプラットフォームへ來て横づけになつた。
おていさんは耐らなく嬉れしさうな顔をしながら、
「とうとう來ましたのねえ。」と、云つていそいそ立ち上つた。お絹も嬉れしさに少し笑ひながらそのまゝ信玄袋を持つて、開かれた扉からプラットフォームへ降りていつた。
降る雨のせいか乘降りする人も少くて、そのなかには顔を見知つた人はひとりもゐない。お絹はほつとしたやうな氣になつて、おていさんの

あとからブリッヂを上つていつた。
停車場の出口へ來ると、そこからは懐かしい佐山の町がひと眼に見渡たされる。何處をみても昔と少しも變らなくて、一寸とした店看板にも古い追憶がなつかしく浮んで來る。
この雨ではまさか歩いてもいけないのでお絹もおていさんもはたと當惑してしまつた。と云つて人力車に乘るにはもう金が手薄くなつてゐるので、二人は何とか方法を考へなければならなかつた。
おていさんはやがて兎に角荷物を停車場へ預けて、何處かそこいらの知つた家で傘をかりて歩いていかうぢやないかと云ひ出した。おていさんはもう見えも外聞も構つてはゐられないといふ風であつた。
お絹も仕方がなしにさうきめて、荷物を驛へ預けるとそのまゝ下駄をぬいで跣足になつた。そして驛のすぐ前に運送屋で一軒知つた家がある

ので、そこへ傘を借りに寄つた。
運送屋の息子は思ひもかけぬ二人の姿を見ると吃驚して。
「お、お絹さん、おていさんも一緒だな。いつ歸つて來ました。今の汽車かね？」と、云ふ。
お絹とおていさんはそれ〴〵愛想らしく挨拶をした。
と、運送屋の息子はやつと合點がいつたやうに、お絹の顏を見て、
「はゝあ、お前さん、何だな。お母さんの病氣で歸つて來なすつたんだな。それでもまあえらく早く歸れて結構だつた。電報を見るとすぐに歸つて來なすつたんだね。」と、合點きながら云ふ。
お絹はそれを聞くとあべこべに悸乎として、
「えッ、母が病氣で御座いますつて？」と、訊き返したが、男はその顏を怪訝さうに見て、

「まあ、お前さん、笑談云つちや可けねえ、お母さんの病氣のことを云つてるだあよ。はゝゝゝ。可笑しな人だ。」と、云ふ。
お絹は猶のことどぎまぎして息をつめながらもう一度訊き返したが、運送屋の息子は今度は眞顏になつて、
「ぢやお前さんお母さんの病氣を知らずに歸つて來なすつたのか。まあ一體何としたちうんだらう。」と、云つて、やがて前後の樣子を細に話して呉れた。
その時、お絹の知らない間にいつしかなつかしい彼女の母親は重病に罹つてゐたのであつた。運送屋の息子は人傳てに聞いたので詳しいことは知らなかつたが、なんでもその話によると母親は今慈雲寺を出て、生藥屋の紀州屋の世話で、裏の町の木挽屋の二階に病臥してゐるらしかつた。

それを聞くとお絹は一刻もじつとしてゐられなくなつて、おていさんはそのまゝにして置いてそこで傘を貸して貰つて、降る雨のなかを何は兎もあれ大急ぎで紀州屋の方へ驅けつけていつた。

二十八

お絹は唯木挽屋の二階と聞いたゞけなので、そんな家が何處にあるのだか、一寸思ひ出せなかつた。で、その足で先づ生藥屋の紀州屋へ驅けつけて見ると、そこの店には顏を見覺えた毬栗頭の小僧がたつたひとりで店番をしてゐて、お絹が入つてゆくと馬鹿みたやうな顏をしてにやりにやりと笑ふ。

お絹は急き込んだ調子で主人はと訊いてみたが、その小僧は相變らず笑ひつゞけながら、「旦那は裏の木挽屋へいつてゐなさるだあ。昨夜からお寺のおつかさんがひどく惡いでな。」といふ。寺のおつかさんとはお絹の母親のことである。小僧はお絹をよく知つてゐながらそんなものゝ云ひ方をするのであつた。

それを聞くとお絹は母親の惡いのがいよいよ確からしくなつて來たので、思はず涙ぐみながら、今度はその木挽屋といふのを訊ねた。小僧は立ちもしずに、その處を敎へて呉れた。

お絹はそれを皆までは聞かずに、又すぐと戸外へ飛びだした。雨は横しぶきに傘を掠めて、ともするとお絹の肩から胸へさつと霧雨が降りかかつて來る。彼女はもう着物がぬれるのも何も構つてはゐられなかつた。

敎へられたとほりに町中を流れてゐる小川の小橋を渡つて、地藏樣のある四辻を右へ曲ると、もうそこいらは町外れのやうな寂しい裏町にな

つてゐた。黒ずんだ茅葺屋根がつゞいて、往來には人ッ子ひとり通らない。そのなかをあれでも二丁ほど歩いてゆくとなるほど一軒の見る影もない木挽屋があつた、戸外には木片や鋸屑が汚らしく散らかしてあつて家のなかでは三人ばかりの職人が軋むやうな音をたてながら、しきりに木を挽いてゐる。

お絹はつかつかとその店へ入つていつた。母親の名を聞くのが妙に恐いやうな氣がしたので、彼女はそこにゐた年老つた親爺に先づ紀州屋の名を聞いてみた。

とその親爺は何も彼も心得てゐるやうな顔をしながら、

「あんた東京から歸つて來なすつたんだんべ。お寺のおつかさんの娘さんだあな？」と訊く。

お絹は合點いてみせた。

と、親爺はそのまゝ土間の奥へ入つていつて、急な階子段の下から、

「紀州屋の旦那。旦那。東京の娘さあが歸つて來なさつただよ。」と、叫ぶ。

その聲に應じて誰かゞ二階で返答をしたが、何を云つたのだかお絹には聞えなかつた。

お絹は親爺が上れといふので、そのまゝ足を拭いて土間へ入つていつた。そして激しく胸を轟ろかせながら階子段を上つていつたが、そのうへは船底を被つたやうな薄暗い部屋になつてゐて、入口には紙襖も障子もないので、小窓から射し込んで來る薄明りのなかに寢てゐる母親の姿がぼんやりみえてゐる。その枕許のところには紀州屋の親爺と昔から寺にゐる寺男の作爺がたつた二人でしよんぼり肩がぬけたやうな恰好をして坐つてゐる。ふと氣づくと何處からかぷんと線香の匂ひがして來たの

で、お絹は先づ何よりもはつとした。

紀州屋はお絹の顔をみるとさも待ち兼ねてゐたやうに、

「お、お絹さんか。よく歸つて來て呉れた。さ、まあこゝへ入んな。」と嬉しさうに云つて、自分の座をゆづる。四疊半ばかりの部屋なので、お絹は腰を下ろす場所もないのであつた。

お絹は餘りの穢るしさに稍呆れて立つてゐたが、紀州屋はそれをみると、急に又悄れ返つて、

「だがお絹さん、ほんとに殘念だつたなあ。全く惜しいことにやおつかあはもう可けねえんだ。」と、口のなかで云つて、そのまゝ顔を背けてしまふ。

お絹はそれを聞くと胸つぶるゝばかりに驚いて、思はず、

「えッ、……」と、叫んだが、そのまゝ狂氣のやうになつて、いきなり

母親の枕許へ摺り寄りながらその顔を覗き込んだ。

縞目も分らぬやうになつた煎餅布團のなかへ半分顔を埋めて寢てゐる母親はもう此の世の人ではないのであつた。鄕里を出るときに見たつきり、その後は寫眞さへも見なかつた母親の面貌は、かうも變るものかと思はれるほど慘ましく變り果てゝゐた。髮は僅かの月日の間にすつかり眞白になつて、苦勞に苦勞を重ねたせいか、痩せ削けたその顔には數へきれぬ辛勞の皺が刻まれてゐる。そして唇の色は鉛のやうに蒼く沈んで、ひと眼みても物凄いやうな憐れな死顔になつてゐた。

お絹はそれをみると忽ちそこへ腰を落として、わつと聲をあげて泣伏してしまつた。

お母さん。お母さん。」と、血を吐くやうな聲で呼びかけてはみたが、もう母親の唇はそれに答へる力をもつてゐなかつた。お絹はたゞひた

泣きに泣いた。

紀州屋はそれをみると、老いの眼に涙を浮めながら、

「いや、全く無理もねえ。こりや泣く方が道理だ。お前も東京から態々かうして歸つて來て、さぞお母あに逢ひ度かつたらう。お母あもどうかしてひと眼でもいゝからお絹に逢つて死に度いといひ暮らしてゐなすつた。それもついいましがたのことだつた。私もどうかしてそれまで息のあるやうにと思つて、醫者樣に賴んで何遍か注射もして貰つたゞが、定命のねえものは仕樣がねえ。丁度今から二時間ばかり前に息を引取つてしまひなすたゞあ。」と、涙ながらに云ふ。

お絹はそれを聞くともう身も世もあられぬやうな悲しさが胸一杯に込み上げて來た。たつた二時間の違ひで到頭母親の死にめに逢ひそこねてしまつたのである。もしかうした病氣と知つてゐれば、たとへおていさ

がどうならうと一昨夜東京をたつて歸つて來る筈であつた。お絹はたつた二時間と聞くともう身を悶え、齒をくひしばつて涙の限り泣きつゞけた。

併しもういくら泣いたとて母親の魂魄は再び此の世に歸つて來るとはないのである。

紀州屋は漸く涙を拭いて、

「いや、お絹さん、お前の嘆くなあ無理もねえ話だが、併しもうどうしたつて佛樣のおそばへ行かにやならねえお母あの體なんだ。もうかうなつたからにや斷念めてしまはなくちやならねえ。もう泣くなよ。いくら泣いたつてもう追附かねえんだ。」と、又彼も多愛のない涙聲になつてゆく。

お絹は袂で顏を掩つたまゝ、

「でも、小父さん、私、せめて息のあるうちにお母さんに逢ひ度う御座んした。こんなことゝ知つたらすぐにも歸つて來る筈でしたものを……。」と、歎りあげながら云つたが、紀州屋はそれを引取つて、

「いや、私ももう三日ばかり前から容態が惡いんでどうかしてお前にそのことを報らせようと思つたんだが。なにしろお前のゐどころがまるで分らねえんで、此方ぢや途方に暮れてしまつたんだ。松平さまのお邸ときいたから、そこへも何遍か電報を打つてみたが更らに返事がねえ。私やどうしようかと思つてひとりで心配してゐたゞあ。一體お前は何處で電報を受取んなすつたゞあ。」

お絹はさう云はれると穴へも入り度いくらゐであつた。もう此の場になつて嘘をついても仕樣がないので、彼女は事の顚末をすつかり紀州屋に話してしまつた。こんなことはつゆ知らずに佐山へ歸つて來たこと、驛前の運送屋で初めて母親の樣子をきいて、慌てゝ驅けつけたこと、それを語つてゐるうちに彼女は自分の身のふしだらが耐らなく胸をせめて來た。

紀州屋は呆れた顏をして聞いてゐた。

いくら嘆き悲しんでももう仕方がないので、お絹はしばらくするとそつと涙を拭いて母親がかうなるまでのなりゆきを紀州屋から細々と訊いた。もう聞く事毎に涙の種でないものはなかつた。

お絹は母親が明日のものにも困るやうな、零落のどん底に沈んで、僅かに紀州屋の情に縋つて、この木挽屋の二階でやつと露命をつないでゐた日のことを聞かされるとどうしてもじつとして聞いてはゐられなくなつた。あゝ母親はそれまでにして自分が迎へに來る日を待ちあぐねてゐたのである。それを自分はどうであらう、道ならぬ戀に踏迷ひ、浮世の

波に揉まれ揉まれて、今日までついに何ひとつ仕上げるでもなく、しかもこんな衰殘の身となつて再び鄕里へ流れ歸つて來たのである。もし邪路に迷はなければもう今頃はどうにかかうにか、ひとりで生活の出來る位置も出來て、母親にも決してこんな苦勞をかけなかつたであらう。それを思ふとお絹は我れながらずたずたに、この汚れた體を引斷つてしまひ度いやうな鋭い悔恨の念に襲はれた。

窓から射し込んで來る薄暗い光は母親の死顏を漸次と暗く悲しげに照して來る。それと一緒に戸外では急にざあつと雨が大降りになつて來て軒先を傳ふ雨滴の音は騷々しく騷いでゆく。階下からは、木を挽く音が啜り泣くやうな哀調をおびて響き上つて來た。

お絹はじつとしてゐると地の底へ吸ひ込まれてゆくやうな氣持ちがして來た。すべてが夢のやうで、悔恨は先から先と募つてゆく、もう泣かうにも泣く力さへないやうな絶望が來て彼女の胸を嚙み裂いてゆくのであつた。

お絹は母親の臥床の傍へ顏を埋めて、又身悶えしながら、

「お母さん、お母さん。」と聲を限りに叫んでみた。

母親の死骸は石のやうに押默つて、雨の音ばかりがざあざあと强くなつてゆく。

お絹は又激しく嗚咽しだした。

二十九

紀州屋の情でとにもかくにも母親の野邊送りだけはやつと濟ませたが何處といつて賴つていくところもないので、お絹は浮草の身の賴りなさに葬ひの濟んだ後はしばらくの間紀州屋へ厄介になつてゐて、どうにか

身の振り方をきめようとした。

それには先づ事の次第を松平家へ訴へて、豫ねての約束もあること故この際自分の身のたつやうに僅かづゝでも仕送りを受けようとした。お絹は或日正敏へあてゝ涙の出るやうな長い長い手紙を書いた。

今日くるか明日來るかとその返事を待ちあぐねてゐたが、松平家からはその後何の消息もない。四日が五日になり、五日が十日になつてもふつりとも音汰沙がなかつた。

お絹は唯一途にその事ばかりを當てにして、毎日のやうに手紙ばかり氣にしてゐた。紀州屋の主人もあんまりお絹の樣子が不思議なので、いろ〳〵と前後の事情を訊ねたが、お絹もさすがに隱すことが出來なくなつて、東京へ出てからのことを逐一打明けて話してしまつた。

紀州屋はそれを聞くと眉を顰めたが、併しもう出來てしまつたことは

仕樣がないと云つた。そして自分も相談にのつてやると云つて、始終店へ出入してゐる小學校の教師に賴んでよく事情を盡すやうな手紙を書かせて、松平家へ宛てゝ出した。

その返事はすぐさまやつて來た。それは同家の執事の岡田の手蹟で、仰越の趣きは當家では少々存じ寄りがあつて到底應じることが出來ない、破倫な生活をして、此方の命令に背き、しかも當家へ恥ぢを與へるやうなことをする女には同情を寄せることが出來ない。此の後はどうなりとそちらの勝手に御處置をなさるがいゝといふやうな、思ひも懸けぬ激烈な返事であつた。

お絹はそれをみると歯噛みをして口惜しがつた。いくら自分の行爲が惡かつたにもせよ、それではまるで體よく詐かれたやうなものである。國へさへ歸つてゐれば、身二つになるまで、補助してやると、あれほど

言葉をつがへて置きながら、今となつてこの云ひ分はどうであらう。松平家では、この自分をまるで犬畜生のやうに思つてゐるのである。

お絹も一時はさう思つてひどく腹を立てゝみたが、併しそのうちにも何も彼も斷念めてしまはなければならない時が來た。思ひ懸けない時に母親を喪つた彼女はこの世の中のすべてに對して深い〳〵絶望を懷いてゐたのであつた。たとへどんな薄情な目に逢はせられても、もうそれは拙い自分の運命である。かうなるのが生れぬ先からの約束でいかに跪いてみたところで、悶えてみたところで、どうにもしようがないのである。母を喪つた悲しみは彼女にこんな暗い斷念を與へたのであつた。

それからはお絹は唯浮草のやうにその日その日を涙のうちに送つた。慈雲寺の墓地の端れにある亡き母の新墓へお詣りをするのがたつたひとつの慰めで、彼女は心の底からどうかして一日も早くあの母親の傍へ行ける日の來ることを望んでゐた。

そのうちにお絹はさういつまでも紀州屋に厄介になつてゐる譯にもいかないのでどうにかして口を糊するだけの道を求めて自活していかうと思ひ立つた。それにはこんな佐山のやうなところでは口がないので、佐山から十里ばかり離れた海沿ひの平島といふ港町へいかうと思つた。そこは古くからの港でいろいろな會社や商店なども數多くあるので、そこへ行つたならばなにか職を得る道があるだらうと思つた。

お絹は佐山を離れる前にふと民雄のことを思ひ出したので、兎に角あれからは音信も不通になつてゐるし、逢つてみたいやうな懷かしさも湧くので、一度民雄の家へ訪ねていつてみようと思つた。こんな體になつて逢ひにいくのはいかにも恥かしくはあつたがどうせ又すぐに遠く離れてしまふ體なので。彼女は或日のこと到頭紀州屋にもそれとは云はずに

恥を忍んで訪ねていつたのであつた。

民雄の家は町でも本通りのめぬきの場所にあるので、彼女は人に顔を見られるのを避けながら、こつそりとその門をくゞつた。民雄の父が失敗して破産してしまつてからは、その家の母家の方は人に貸して、もと長屋になつてゐた小さな家を引直してそこへ引移つてゐたので彼女はやつとそれを訪ねあて、入口の木戸を入つた。

案内を乞ふとなかゝら出て來たのは民雄の弟らしい十六七の少年であつた。その少年は怪訝さうな顔をしてまじ〳〵とお絹の姿をみてゐたが、お絹が民雄の在否を訊くと子供らしい調子で、

「兄さんは家にはゐないよ。」と、云ふ。

お絹は一寸そこらへ用達にでも出たのだらうと思つたので。何時頃歸ると訊き返すと、少年は笑ひ出して、

「あの兄さんは先月の末に滿洲の方へ行つてしまつたんです。いつ頃歸るか僕達には分りません。」と云ふ。

滿洲と聞いてお絹は吃驚してしまつた。それとなく紀州屋の主人に訊いてみた時には何も變りはないやうなことを云つてゐたが、滿洲へ行つたとは餘りに意外であつた。そんなことを云つて嘘をつくのではあるまいかと思つたので、お絹はやがて根掘り葉掘り樣子を訊いてみたが、その返事を思ひ合せて見ると、民雄は何か事業の目的でもあつてそんな遠いところへ踏み出していつたものらしかつた。

お絹の絶望は又ひとつの重荷を加へた。

日本にゐないと聞いてはどうすることも出來ないので、お絹はやがてもしお消息のついでゝもあつたら、東京からかう云ふものが訪ねて來たと書添へてやつてくれと、未練らしく頼んでそのまゝ民雄の家を出た。

その日はいゝ天氣で、黄昏の景色が、いつになく美しかつたので、お絹はそのまゝ又慈雲寺の墓地の方へとぶらぶらさまよひ歩いていつた。考へれば考へるほどどうしやうもない身のうへである。母を喪ひ、頼る人には捨てられてしまつた頼る邊もないこの身の行末はどうなつてゆくことであらう、もう一度どうかして東京へ出てみたら何とかならないものでもあるまいが、しかし、それをするには、もう餘りにこの身が疲れ過ぎてゐる。

それにしてももしこの胎に宿る子が生れ落ちたとしたらどうなることであらう、まだ生み月までには四五箇月の間はあつたが、併しもう人目には包みきれぬほどの姿になつてゐるのである。たとへこれから平島の港へ出ていつたとしても、こんな體では思ふやうに働くことも出來まいそれを思ふとお絹は耐らなくなつて來た。

うつらうつらと涙に沈みながら慈雲寺の並木のところまでさまよひ歩いて來ると、その時ふと後から、

「お絹さん、お絹さん。」と、低い聲で呼ぶものがある。

吃驚して振顧ると、それは佐山へ歸つて以來一度も顔を合はせなかつたあのおていさんであつた。おていさんは色蒼ざめたその頰にさも懐かしさうな笑ひを浮べながら、

「ほんとにしばらくでしたわね。私是非一度お悔みに上らなけりやならないと思つてゐたんですけど、何かと取紛れてつい失禮してしまひました。」と、云つて、もう涙ぐみながら、「ほんとにとんだことでしたわねえ。」と云ふ。

お絹はさう云はれると、もう口さへきけないのであつた。

二人は涙ばなしに耽りながら、いつの間にか慈雲寺の境内も通り越し

て、裏山にある池のほとりまで來てしまつた。今からはもう長い月日の昔、初めて民雄と戀を語つた樹立のほとりは、その當時と少しも變つてゐなかつたが、しかしそこに立つお絹の身は傷ましいほど變り過ぎてゐた。

お絹はとある木の切株にぐつたりと腰をおろして、じつと四邊の景色を眺めながら、

「ねえ、おていさん。」と、呼びかけた。

おていさんもそのまゝお絹の前へ踞んだが、お絹はやがて泣きながら

「おていさん。私實はもうあなたにもお別れしなけりやなりませんのよ。」と、云ふ。

おていさんは吃驚して、

「まあ、どうして？　どうしてあなたそんなことを仰有るの？　又東京へおいでになるんですか？」と、羨ましさうな顏で云ふ。

お絹はそれを手で打消して、

「いゝえ。私はもう死んでも東京へなんか參りません。それよりも私實はもう紀州屋さんへも、さうながく御厄介になつてゐる譯にもいきませんから、今度はひとつ思ひ切つて平島へいつてみようと思つてゐますの。」

「まあなんだつてそんなところへ被往るの？」

「何故つて私さうでもしなければ、御飯を頂いて行くことが出來ないんですもの。佐山にゐたつて親類はなし、賴りになる人はなし、私はみすみす餓死にしてしまはなければなりませんもの。」

おていさんはそれを聞くと急に嗚咽しだして、

「ほんとうに私達はどうしてから不仕合はせなんでせう。もとを云へば

私達が惡いんですけど、神樣だつてもうこのうへ私達をお苦しめになることはないぢやありませんか。」と、恨めしげに啜泣きをしながら、「實はね、お絹さん。私もあなたと同じことを考へてゐるんですわ。御承知のとほり私の父や母はあんな氣性の人だもんですから、こんなになつて歸つて來た私をまるで罪人かなにかのやうに云ふんです。私は自分が惡いのをよく知つてゐますので、耐へられるだけは耐へてみましたし、それにこんな目に逢はされるのもひとつには今迄の罪の報いだと思ひますのでどんなことがあつても我慢しとほすつもりでゐたんです。ところが此頃になつて私もうしみじみ厭になつて來たんです。一寸したことにでもすぐにお前みたやうな奴は死んでしまへ、恥知らず奴などゝ云はれますので、私もう辛くつて、辛くつて耐らないんです。昨夜なんかも私、父にさんざ打たれまして、こんな酷い目に逢はされましたんです。」と云つて、おていさんはお絹の眼の前へ、紫色になつた二の腕を出してみせた。

お絹は傷はしさうにおていさんの顏とその傷とを見比べてゐた。

おていさんはしくしく歔り上げながら、

「それで私、もういつそこんな辛い世の中ならひと思に死んでしまはうと思つて、……」と云ひかけて、涙の光る異樣な眼光でじつと池の方を見やつた。池は蒼黑く、死の瞳のやうに澱んで、眞紅な夕榮雲の一片を浮べたまゝ深い沈默に閉ざされてゐる。

お絹はぞうつとして身内が引緊るやうな寒さを覺えた。

二人はそのまゝ口を噤んでいつまでも〳〵じいつと池の面を見つめてゐた。

何處かで鳥の羽音がはたはたと囁く。

黄昏は漸次と夜に移つていつた。

三十

それから三日ばかりの後にお絹はどうにも仕様がなくなつて、兎に角平島の港へさすらつてゆくことに心を決めた。おていさんに相談するとおていさんもふとその氣になつて、彼女も一緒に家出をする手筈に定めてしまつた。

二人は佐山から二里ばかりの道を河舟で下つて、そこの河口にある小さな船着きから平島通ひの小蒸汽に乘ることになつた。

船は夜の十二時にその船着を出帆するので、二人は海岸の懸茶屋で、それまで時を消して、船が入港するとすぐに艀で乘船した。

僅か六十噸ばかりの小さな通船なので、乘客の數も極めて少なかつた

二人は甲板にある三等船室に入つて、隅の方へ小さくなつて坐つてゐた。天井には小さな角洋燈がついてゐるきりなので、そこらはまるで牢獄のやうに朦朧としてゐる。舷へ打寄せる波の音も泣いてゐるやうに悲しかつた。

十二時少し過ぎると船はやつと長い長い汽笛を吹き鳴らしながら出帆した。その汽笛は寂靜まつた河口の町の方へ陰々と谺してゆく。

三等船室には二人の他にも商人體の男と學生のやうな青年が三人ばかり乘つてゐたが、船が出ると間もなく汚い疊敷のうへゝごろりと横になつて寐てしまつた。

二人は冷たい板壁に倚りかゝつたまゝ口もきかずに深い思ひに沈んでゐた。そのうちに船はとある岬角を曲つて、漸次と外洋の方へ出ていつ

お絹はふとおていさんが、
「あら、月が出ましたね？」と、鼻聲で呟くのを聞いた。
とみると、丸い硝子窓の向うには盆のやうな大月が今海上から洗ひ出されたやうにぽつかりと浮び出てゐる。四邊を罩めた淡いガスはそれと一緒に銀色に輝いて、一條の銀蛇は波から波へ際涯もなく流れてゆく。
お絹は默つてそれをみてゐた。
おていさんはやがて思ひに屈したやうに、
「お絹さん。外へ出てみませんか。」と云つた。
お絹は默つて合點いて、やがて二人はそつと扉を開けて寒い海風の吹いて通る甲板へ出ていつた。
甲板のうへには水夫の影も見えなかつた。
二人はそのまゝ人氣のないところで何か話でもしようと思つて船尾の

方へ歩いていつた。そしてそこに積んであつたロープのうへゝ並んで腰を下ろした。
二人の眼の前には蒼白い月光に煙つた海面が漂渺と果てしもなくひろがつてゐた。陸の方をみると黑い山脈は山脈に續いて、とある岬角の頂きには燈臺の火光が夢のやうに明滅してゐる。推進器に蹴上げられる水は眞白に泡だつて、それからそれと長い長い水尾をひいてゆく。波の音はまるで歌をうたつてゐるやうに悲しかつた。
おていさんはしばらくすると、
「ほんとにいゝ景色ですわねえ。」と、氣を紛らかすやうに云つた。
お絹はそれと一緒にどうしたのか狂氣したやうにおていさんの手を握りしめて激しく泣きだした。そして消え入るやうな聲で、
「おていさん、おていさん。」と、呟いた。

二人はさうしたまゝものも云はずに泣いてゐた。その時絶望に沈んだ二人の心には暗い夜の海の惑はしが迫つて、死の影が陰密の間に其黒い誘惑の手を伸してゐたのであつた。

その翌々日の朝早く岬のすぐ傍にある砂川といふ村の漁師が夜釣りに出懸けた歸りに岬から二里ばかりの沖合で不思議な浮流物を發見した。初めは材木でも流れてゐるのかと思つてさして氣にも止めなかつたが魚群を追うて漸次と沖へ出てゆくうちにその浮流物はまるで影のやうについて來るので漁師達は變に思つてそつちへ漕ぎ寄せていつた。近づいてみると何やら紅いものがちろりちろり浪間に浮いてみえる。それと一緒に舳に立つてゐた船頭は大聲をあげて、

「おう、又佛樣だあ。若い女の佛樣らしいぞ。はゝゝゝ、又情死でもあつたでねえか。」といふ。

やつとのことで、船を漕ぎ寄せてみると、波間に漂つてゐるのは若い女の死骸であつた。

しかもそれは二人で、一人は俯向けになつて、もう一人は空を仰いで波のまにまに流れてゐるのであつた。

船頭達はそれを不思議がつて、

「なんでえ、こりや女同士の心中だ、妙なことをやつたもんでねえか。」

といつて、しばらくの間手もつけずに眺めてゐた。それこそ佐山から來たあの二人の亡骸で俯向いてゐる方はお絹で、仰向いてゐるのがおていさんであつた。よくみると二人は胸のところをしつかりと下帶で結んでその端とその端とを死出の國までも解けぬやうにかたくかたく緊縛して

ゐるのであつた。黒髪はいつか波に弄ばれてばらばら解けてしまつたので襟から首筋へかけてまるで水藻のやうにまつはりついてゐる。着物はしどけなく披がつて、その顔は二人とも死んでからまで泣いてゐるやうな悲しげな相をあらはしてゐるのであつた。

漁夫達はそのまゝにして置く譯にもいかないのでやがて縁喜を祝つてから帆綱でその死骸を船へ結びつけ、午少し過ぎにやつと自分達の村まで曳いて來た。

二人の死骸は漁師達の手で砂濱へ引上げられた。巡査の駐在所まではそこから二里ほどあるので、夕方でなければ檢視の警官はやつて來なかつた。それまで二人の死體は筵をかぶせられたまゝ荒涼とした荒磯の砂のうへに横たへられてゐた。

夕暮れは漸次と砂丘の蔭から漂いて來る。よくも不思議な運命にひき

終